

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第28号 (通巻第56号)

体育心理学専門領域

2016年7月発行

一般社団法人 日本体育学会体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、一般社団法人日本体育学会 体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員の選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単位無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員の任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員の選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。
- 附則
1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
 2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
 3. この会則は、平成21年8月27日から施行する。
 4. 平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。

体育心理学専門領域の役員

任 期：平成27年4月1日～平成29年3月31日

会 長：阿江美恵子

理事長：関矢寛史

理 事：学会大会委員会（○土屋裕睦、北村勝朗、内田若希、工藤和俊）

企画委員会（○杉山佳生、兄井 彰、西田 保）

広報委員会（○森 司朗、荒木雅信、山本裕二）

庶務・会計委員会（武田守弘、田島 誠）

○委員長

監 事：木島章文、田村 進

幹 事：中本浩揮

事務局は広島県東広島市鏡山1-7-1 広島大学大学院総合科学研究科・関矢寛史研究室とする。

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第28号 (通巻第56号)

体育心理学専門領域

2016年7月発行

巻頭言

体育心理学専門領域「会報」(第28号)の刊行によせて

体育心理学専門領域会長 阿江美恵子

スポーツ庁ができて、体育・スポーツがやっと社会的に認められ始めた嬉しく思っていたのですが、多くの研究者は2020年東京オリンピック・パラリンピック大会が終わったあとの心配をしています。それは無理からぬことだというのが、ロシアの組織的ドーピング問題、元プロ野球一流選手の麻薬常用による逮捕、プロ野球選手の賭博問題、バドミントン選手の違法賭博の発覚(2016年)に示されていると思います。

「スポーツしかできない常識のない人間」「頭まで筋肉」にならないように、学問を高めてきたはずなのに、「競技スポーツ」の一部が異常な方向に進んでいることに歯止めをかけることができていません。ほんの一部の心ない選手たちかもしれませんが、跳びぬけた能力を持つ人が社会でどのように過ごしていくかは、心理学が探求してきた重要な課題であると言えます。

子ども時代には一つの種目に限定しないで総合的な身体操作を身につけるコーディネーショントレーニングの必要性が指摘されています。体育教育は社会性の獲得も大きな目標にしています。そこには、小さなころからずっと一つのスポーツに専心している問題は起きるという問題意識が見えます。狭い社会に閉じ込められた社会性の欠如の行き着くところは、社会に適応できない行動に繋がります。

スポーツ選手の引退後の問題は体育心理学領域でも多くの方が関心を持っていると思います。長く続けることができるのは素晴らしいことかもしれませんが、いつまでもスポーツから足を洗えない選手もいます。30代後半の選手が若い選手と全く遜色ない活動量を維持できないのは、生物の宿命です。スポーツとのかかわり方のいくつかのモデルを示すことも重要なことです。

ここでもスポーツという言葉を多用し、体育という語の影が薄くなりましたが、「体育」は身体教育

全般を網羅した重要なキーワードです。日本体育学会は社会に意見を発信する法人として活動内容を工夫して参りました。大学研究者の国際化は日本体育学会でも促進していくべき課題となっており、他国に比較して充実した体育教育は改めて見直されています。

27年度には交流協定を結んだドイツ、台湾、韓国、中国と、学会大会へ相互に人を派遣して交流を促進していくルールが定められました。東京オリンピック・パラリンピック大会では、国際スポーツ科学会議を開催する予定です。人間にとって身体を思い通りに動かし、自分の身体能力の向上を目指すことは、人間性の向上にも繋がっていくと思います。

本稿を書き終える直前、4月14、16日に熊本が大地震に見舞われ、数え切れない余震が続いています。空から見た地表の大きさに比して人間はなんと小さいことか。がんばって生き抜くという「希望」を持って、被災から立ち上がるための体育をお伝えする努力をお願い致します。九州頑張れ!!

体育心理学専門領域会報 第28号
目次

巻頭言	i
目次	ii
I. 日本体育学会第66回大会関連	
1. キーノートレクチャー1	
題 名：心理的プレッシャーとスポーツパフォーマンスー運動制御からの理解ー	
司 会：工藤和俊（東京大学）	1
演 者：田中美吏（武庫川女子大学）	2
傍聴記：筒井 香（大阪体育大学）	3
2. キーノートレクチャー2	
題 名：オリンピック選手のメンタルマネジメント ー17年間の研究、サポートプロジェクト参加の経験からー	
司 会：内田若希（九州大学）	4
演 者：猪俣公宏（中京大学名誉教授）	5
傍聴記：遠藤拓哉（広島大学大学院）	6
3. シンポジウム	
題 名：ジュニアトップアスリート育成に果たす体育・スポーツ科学研究の役割	
司 会：土屋裕陸（大阪体育大学）	7
演 者：勝田 隆（国立スポーツ科学センター）	8
国際的視野から見たわが国の体育・スポーツ科学研究について 国際競技力向上に関する実践的立場から考える	
演 者：杉田正明（三重大学）	9
ジュニア・ユース年代にあるトップアスリートの追跡調査	
演 者：田中ウルヴェ京（慶應義塾大学大学院）	11
トップアスリート育成に関わる体育・スポーツ心理学研究者の役割	
傍聴記：中須賀巧（福山平成大学）	12
4. 口頭発表（座長報告）	
座 長：洪倉崇行（桐蔭横浜大学）	13
座 長：山田憲政（中京大学）	14
座 長：永山貴洋（石巻専修大学）	15
座 長：國部雅大（筑波大学）	16
座 長：佐々木万丈（日本女子体育大学）	17
座 長：中本浩揮（鹿屋体育大学）	18
座 長：磯貝浩久（九州工業大学）	19
座 長：村山孝之（金沢大学）	20

5. ポスター発表記	
発表者 1 : 小川 茜 (広島大学大学院)	21
発表者 2 : 池田理紗 (山梨大学大学院)	22
6. 大会参加記	
大会参加記 : 藤本太陽 (日本体育大学大学院)	23
7. 特別セミナー	
題 名 : ドイツの体育・スポーツ心理学	
司 会 : 杉山佳生 (九州大学)	24
演 者 : 近藤明彦 (慶応義塾大学)	25
傍聴記 : 星川麻里子 (大阪体育大学)	26
II. 研究会の活動報告	
スポーツ社会心理学研究会 : 杉山佳生 (九州大学)	27
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 : 高妻容一 (東海大学)	28
運動学習研究会 : 工藤和俊 (東京大学)	29
臨床スポーツ心理学研究会 : 中込四郎 (筑波大学)	30
スポーツ動機づけ研究会 : 伊藤豊彦 (島根大学)	31
III. 研究室紹介	
研究室紹介 : 田中美吏 (武庫川女子大学)	32
IV. 学位論文紹介	
佐々木丈予 (広島大学)	35
鈴木啓央 (名古屋大学)	37
V. 海外情報	
町田 萌 (順天堂大学)	39
VI. 日本体育学会第67回大会関連	
日本体育学会第67回大会案内	41
VII. 事務局報告	
平成27年度日本体育学会体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録	43
平成27年度日本体育学会体育心理学専門領域 総会議事録	45
平成28年度日本体育学会体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録	48
資料1 平成27年度決算報告書	50
編集後記	

I．日本体育学会 第66回大会関連

司会報告

工藤和俊（東京大学）

今年度、国土館大学にて開催された日本体育学会第66回大会の体育心理学専門領域キーノートレクチャー1は、「心理的プレッシャーとスポーツパフォーマンス—運動制御からの理解—」と題して武庫川女子大学の田中美吏先生にご担当いただきました。田中先生はこれまで、心理的プレッシャーが運動パフォーマンスに与える影響について、心理学のみならずバイオメカニクスおよび神経生理学的手法を取り入れて研究されてきました。日本における心理的プレッシャーや「あがり」に関する研究は、1964年の東京オリンピックに向けた選手の実力発揮等を目的として始められ、性格特性との関連が明らかにされたり、リラクセーションや自律訓練法を取り入れた対処技法が発展しました。

前回の東京オリンピックから50年が過ぎ、スポーツ界はいま2020年東京オリンピックへ向けて盛り上がりを見せています。また、心理的プレッシャーの克服は昔も今もアスリートの大きな課題であり、体育心理分野における重要な研究テーマとして位置づけられています。さらに、あがりの問題はスポーツのみならず、ダンスや音楽演奏など多くのパフォーマンスに共通するものであり、おそらくは多くの方々の関心を惹くテーマであったことから、会場は満員の大盛況となりました。

レクチャーでは、はじめにビッグデータを用いた検証により、サッカー、野球、バスケットボールなどの種目において、過大な心理的ストレスがパフォーマンス低下を引き起こすことが示されました。おりしも今年は全米オープンテニスの男子シングルスにおいて、昨年度準優勝し今年こそは優勝と期待されていた世界ランク4位の錦織圭選手が同41位のブノワ・ペール選手に1回戦で敗れるという波乱がありました。また、女子シングルスにおいても、年間グランドスラムを目指し圧倒的有利とささやかれていたセリーナ・ウィリアムズ選手がノーシードのロ

ベルタ・ビンチ選手に準決勝で敗れました。これらの試合で実際に何が起きていたのか、果たしてこれらの番狂わせの原因が心理的プレッシャーに求められるのか、詳細な分析が望まれるところです。

レクチャーではまた、心理的プレッシャー下での動作変容や皮質脊髄路の興奮性変化など、田中先生がこれまで行ってきた数多くの研究成果が紹介されました。今までの心理学的研究では、心理的プレッシャーとパフォーマンスの関連について検討し、パフォーマンスを左右する要因を探るというアプローチが主流でしたが、田中先生の研究は心理的要因とパフォーマンスをつなぐ動作や神経経路に着目し、運動制御という観点からパフォーマンス低下の原因を明らかにしようとするものです。心理学的現象を生理学や神経科学的観点から捉えることの利点の1つとして、覚醒水準や注意といった用語を生理学的に定義することによって、これらの明確な定量化が可能になることが挙げられます。たとえば、心理学的仮説として知られている覚醒水準とパフォーマンスの逆U字仮説について、覚醒水準の調節にかかわる青斑核ノルアドレナリンニューロンの活動や前頭前野のノルアドレナリン、あるいはドーパミン濃度との関連が明らかにされています。さらに、あがり、不安、ストレス（ストレスへの耐性を含む）に関連して、下垂体—副腎皮質系および下垂体—副腎髄質系を介したホルモン応答や、扁桃核、即座核、中脳中心灰白質、腹側被蓋野など具体的脳部位の応答など、背景となる生理学的機構についての理解が近年益々進んでいることから、今後更なる研究の進展が期待される発表となりました。

最後に、ご来場の方々と貴重な発表をして下さった田中先生に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

演者報告「心理的プレッシャーとスポーツパフォーマンスー運動制御からの理解ー」

田中美吏（武庫川女子大学）

体育心理学専門領域の学会大会委員の土屋裕睦先生よりキーノートレクチャーの担当依頼をいただいた際、とにかく嬉しいという思いを抱きました。それとともに学会大会における60分という貴重な時間を演者1人で担当する重責を強く感じました。このような思いの中、60分の時間をフル活用し、参加者の皆様に演題に関する内容について少しでも有益な情報提供をできるよう、当日に向けたプレゼンテーションの準備を進めました。

準備の際に最も気を付けたことが、多くの専門分野の先生方や学生、さらにはスポーツ選手や指導者などの様々な立場の参加者にとって、分かりやすくかつ参加して良かったなと思っていただけるプレゼンテーションにする点でした。演題中の「運動制御からの理解」という文言だけを見ると、難しそうな基礎研究の紹介になるのではとの印象も受けますが、その印象を払拭できるよう、競技スポーツや学校体育の現場における実践的・応用的視点からも、運動制御の基礎研究がなぜ必要か、どのようにその研究成果を活かせるか伝わるプレゼンテーションにしたいと考えました。

この考えをベースに、当日のプレゼンテーションでは、まず、プレッシャーに関する研究の社会的ニーズが非常に高く、50年以上の年月をかけて国内外で膨大な先行研究が行われており、サッカーの世界的大会でのPKの成功率などから、いかにプレッシャーがスポーツパフォーマンスにマイナスに作用するかを示す実践的データを紹介しました。続いて、プレッシャーに関する研究の基本用語を整理したうえで、性格、不安、覚醒水準、注意の側面からプレッシャーとパフォーマンスの関係を説明する基礎理論を解説しました。それを基に、「運動制御からの理解」を図る基礎研究がなぜ必要かを説明し、キネマティクス（動作）、中枢神経活動、筋活動に関する研究について、これまでの私自身の研究も含めて紹

介しました。

準備の際にもう一つ意図したことが、少しでも多くの参加者にこの演題をテーマとした研究に興味関心を抱いていただき、このテーマの研究ネットワークを拡げたいという点でした。そのためにプレゼンテーションの後半では、選手、指導者、SMT指導士等が最も気になるテーマと考えられる「あがり」の克服法に関する研究を紹介し、さらには私自身が考えるプレッシャー研究の今後の展望について多くの時間を割きました。その中には、似て非なるテーマともいえますが、イップスに悩むスポーツ選手が多く、イップスに関する研究の必要性も痛感していることから、イップスの原因となる運動制御に関する研究の話題も含めました。

この度の発表を終え、キーノートレクチャーでは60分という時間的な余裕からも、普段の研究発表では十分に伝わりきらない研究の背景や応用性、さらには将来性を伝えることができたことを非常に嬉しく思います。改めましてこのような貴重なプレゼンテーションの機会をいただいた関係者各位に感謝を申し上げます。また当日司会をいただいた工藤和俊先生にも感謝を申し上げます。工藤先生自身も演題に関する研究に取り組まれている経緯も含めまして、工藤先生のアシストを受けて心強く発表することができました。最後に、当日会場に足を運んでいただいた参加者の皆様に深謝いたします。この報告を読んでいただくなかで、今一度、プレッシャーやイップスに関する研究の必要性や面白さを再考いただければ幸いです。

傍聴記

筒井 香（大阪体育大学）

これまでスポーツメンタルトレーニング指導士として選手に関わる際、「プレッシャー」や「あがり」に関する相談事例に出会うことが多々ありました。そのため、「心理的プレッシャーとスポーツパフォーマンスー運動制御からの理解ー」というタイトルに強く惹かれ、田中先生のキーノートレクチャーを拝聴致しました。今回は1時間という短い時間にも関わらず、膨大な先行研究の紹介から、最新の緻密な研究の数々をご紹介いただき、非常に濃密なレクチャーでありました。

まず、先生はこれまでの研究背景や膨大な先行研究の存在についてご説明され、その上でサッカーの世界的大会でのPKや、MLBワールドシリーズとNBAファイナルでのホームゲームという具体的事例を取り上げ、プレッシャーの影響についてデータに基づいて示されました。この段階で、タイトルにもある「心理的プレッシャーとスポーツパフォーマンス」の関係の強さを改めて感じる事ができ、さらにフロアーのレクチャーへの興味が深まったことと思います。

続いて、「あがり」やすい性格として特性不安とナルシストの程度に着目し、ゴルフのパッティングとダーツ課題を用いた実験からその影響についてご説明されました。実験結果から特性不安が高い人やナルシストでない人の方が、プレッシャー条件下ではパフォーマンスが低いことが明らかになっているということでした。私の研究テーマは、特性不安の程度などに合わせて、覚醒水準に影響を与えるポジティブシンキングの内容を、変化させる必要性について明らかにすることであり、この実験結果は個人の性格特性を考慮するという視点の重要性を再確認させてくれるものでした。

レクチャー中盤は、動作が生じるプロセスを、情報処理モデルや神経・筋活動の視点からお話いただきました。そしてキネマティクス（動作）に関する

実験結果に基づき、プレッシャーにより生じる動作変化に関するレクチャーと進んでいきました。実験課題はプレッシャー条件下と非プレッシャー条件下における、ゴルフのパッティングと卓球のフォアハンドストローク、バスケットボールのフリースローでしたが、これらの実験の成功はプレッシャーを作り出せるかが鍵となると考えられ、実験デザインを考えるアイデアの重要性に改めて気付かされました。また、中枢神経活動と筋活動に関する実験も多数ご紹介いただくなかで、脳波計による皮質活性の測定や経頭蓋磁気刺激による皮質脊髄路の興奮性の評価などは、一見選手が訴える「あがり」とかけ離れた印象を抱きますが、「あがり」を防止するにはまず「あがり」を知る必要があり、そのためには発生メカニズムを神経レベルから理解することが必要なのだと感じました。

終盤はこれまでの基礎的な研究と現場の選手を繋ぐ、「あがり」の予防法や対処法に関するお話をいただきました。選手が実力発揮のために取り組むメンタルトレーニングが、現場で役立つものであるためには、緻密な基礎研究とそれに基づく応用研究、そしてスポーツ現場の実態を詳細に捉える事例研究といった、様々な研究に基づいてトレーニング方法を開発し、また最新の研究成果を受けて発展し続けなければなりません。スポーツメンタルトレーニング指導士として、「科学的知識を持った実践家」であり続ける重要性を、再認識するきっかけを与えてくださった田中先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

司会報告

内田若希（九州大学）

本年度のキーノートレクチャー②では、猪俣公宏先生（中京大学名誉教授）を演者にお迎えし、「オリンピック選手のメンタルマネジメントー17年間の研究、サポートプロジェクト参加の経験からー」というテーマでご講演いただきました。はじめに、東京女子体育大学の阿江美恵子先生より、猪俣先生のご経歴についてご紹介いただきました。猪俣先生の多大な功績だけでなく、温かなお人柄が伝わるエピソードも交えてご紹介いただきました。

さて、本レクチャーは、「スポーツ心理学」の発祥の説明から始まりました。フランスの月刊誌『La Revue des Deux Mondes』に発表された論文（Coubertin, 1900）の中で、スポーツへの参加動機や心理的特質に関する内容が含まれ、これがスポーツ心理学の先駆けとなったとのことでした。つぎに、猪俣先生が長年にわたりご尽力なさった「メンタルマネジメント研究プロジェクト」についてご紹介いただきました。第1次（1985-1988年）では、種目別のプログラム開発やソウルオリンピックに向けてのサポート（主に個人競技を対象）を実施されたそうです。続く第2次（1989-1992年）では、チームスポーツのプログラム開発やバルセロナオリンピックに向けてのサポートを実施されたそうです。この時期、アメリカではすでに心理スタッフが選手村に入った事例があり、当時の日本オリンピック委員会を説得して、支援スタッフを1名だけ帯同させることが決定したそうです。そのスタッフが猪俣先生であり、実際に帯同する中で、選手が医師やマッサージスタッフに心理面の問題を打ち明け、メンタルマネジメントをしてきた実態を把握できたそうです。

第3次（1993-1995年）では、ジュニア選手のメンタルマネジメントやトップレベルの中高生を指導する指導者に対する調査、認知的能力の向上を目指したトレーニングの開発、および普及のためのビデオ作成などを行ったそうです。指導者に対する調査

では、勝利至上主義ではなく、人間的成長が中核にある教育的な配慮の必要性を念頭においたものだったという点が、非常に興味深かったです。そして第4次（1996-1999年）では、長野オリンピックに向けて、冬季種目に重点を置いてサポートされたことが報告されました。

また、先生が実践と研究を積み重ねてこられたイメージトレーニングに関してもお話しいただきました。ここでは、トップアスリートは覚醒水準が上昇するとイメージトレーニングをうまく遂行していたことから、種目別にその覚醒状態の水準を把握する必要があるとの示唆をいただきました。加えて、今後のメンタルトレーニングにおける課題として、身体面、心理面、技術面、および戦術面のトレーニングを組み合わせたインテグレイテッド・トレーニングが重要となることに言及されました。

現在、私自身は日本パラリンピック委員会・心理サポートチームの一員として活動をしています。パラ・アスリートの支援はオリンピックと比較すると遅れていますが、われわれ心理チームが取り組んできた実践や向き合ってきた課題が、猪俣先生の足跡と重なる部分も多く、多くの視座を与えていただきました。参加された皆様にとっても、様々な示唆に富んだレクチャーとなったのではないのでしょうか。最後になりますが、演者の猪俣先生、先生のご経歴をご紹介頂いた阿江先生、ならびに会場にお越しくださった皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。

演者報告「競技におけるメンタルマネジメント」

猪俣公宏（中京大学名誉教授）

まず、メンタルマネジメントを競技の場において自己の潜在能力を最高度に発揮するための自己管理として捉えた。他方、メンタルトレーニングは自己管理に必要な心理的スキルとし、このようなスキルを単なる競技遂行のためのものに限らず、心身の良好な状態の維持や促進（well being）などを含む広範囲なスキルとして捉えた。

このレクチャーの冒頭では近代オリンピックとスポーツ心理学の歴史的関わりについて取り上げ、クーベルタンのスポーツ心理学への貢献、オリンピックにおけるスポーツ科学国際会議における心理学の討議などについて述べた。その中で、クーベルタンについては「La Psychologie du Sport」(1900) を著し、スポーツ心理学史上、初めて“スポーツ心理学”を専門用語として用いた（Pereira, 2004）こと、またローザンヌで開催された第5回オリンピックスポーツ科学国際会議（1913）ではクーベルタンが主導してスポーツにおける心理学の問題を主なテーマとしたことなどについて説明した。

次に1985年から17年間に及んだメンタルマネジメント研究プロジェクト（日本体育協会、日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会心理班）の概要と成果について報告し、オリンピック選手などトップレベルの選手に対するメンタルマネジメント、メンタルトレーニングに関わる研究やサポート実践の課題について論及した。前述したプロジェクトの概略は次の通りである。第一次プロジェクトでは海外調査を含む資料収集、目的別トレーニング法、種目別トレーニング法にかかわる実証実験 および国際競技大会における心理的サポートの実践研究などが実施された。また第二次プロジェクトにおいてはチームスポーツのためのメンタルトレーニングを主たる研究テーマとして取り上げ、トレーニングプログラムの開発、バルセロナオリンピック大会に向けての心理的サポートなどが実施された。さらに第三次

プロジェクトではジュニア選手を対象としたメンタルトレーニングを取り上げ、発達途上にある選手の特徴を考慮したメンタルトレーニングの開発などが実施された。最後の第四次プロジェクトでは長野オリンピックを念頭に冬季種目を対象としたメンタルトレーニングが取り上げられ、トレーニングプログラムの開発や実際の心理的サポートが各種目で実施された。これらの研究プロジェクト成果の詳細はいずれも日本体育協会スポーツ医科学研究報告（1985～2001）として公表されているので参照していただきたい。さらにこれらの概要に加え、全プロジェクトで使用されたTSMIの標準化、解釈に関わるテスト理論上の問題点、またオリンピック選手のメンタルトレーニングとして最もよく利用されているイメージトレーニングの科学的根拠や実施法の問題点などについても論究した。

終わりに先述した研究プロジェクトに関わった当事者の1人として、トップレベル選手のメンタルトレーニングはトータルトレーニングの加算的枠組みの一部として独立した形で行われるのではなく、各分野（心技体）が相互に関連し、融合された統合トレーニング（integrated training）の一部として行われるべきであることを強調しておきたい。



キーノートレクチャーの様子

傍聴記

遠藤拓哉（広島大学大学院）

今回のキーノートレクチャー2における講義は、中京大学名誉教授の猪俣公宏先生によるものでした。先生は、スポーツ心理学研究の発展に多大な貢献をされ、また過去に日本スポーツ心理学会会長など多くの要職を務められた方です。先生は、「オリンピック選手のメンタルマネジメント—17年間の研究、サポートプロジェクト参加経験から—」と題し、猪俣先生ご自身のサポートプロジェクト参加経験から、日本のメンタルマネジメントがどのような軌跡を辿り、オリンピックと共にどのように変化してきたかを約1時間に渡ってご講義されました。

レクチャーではまずメンタルマネジメントの在り方についての説明があり、その後、日本におけるメンタルマネジメント研究プロジェクトについて年代を追いながら詳しくご講義されました。まずメンタルマネジメントには、基盤となる「心身の良好な状態の維持・促進」があり、その上に「競技に固有な心理的スキルの習得（長期的、短期的な心理準備）」があることを“*One can train his will and perseverance just as well as muscular capacity*”

(Muller, 2000) を引用しながら説明されました。続けて、ご自身の参加された第1次から第4次までのメンタルマネジメント研究サポートプロジェクトを振り返りながら、お話しがありました。第1次メンタルマネジメント研究プロジェクト(1985-88)では、海外調査から始まり、ソウルアジア大会に向けてのメンタルトレーニングプログラム作成と実施、スポーツ種目別プログラムの開発、ソウルオリンピック大会に向けての心理サポートの実施(1988)が行われたことに言及され、日本のメンタルマネジメントの取り組みがオリンピックの成果を期待して始まったことであると知ることができました。また、第2次メンタルマネジメント研究プロジェクト(1989-1992)では、チームスポーツのメンタルトレーニング開発、バルセロナオリンピック大会に向

けての心理サポート、オリンピック参加選手に対する心理調査についてのお話をいただき、個人スポーツからチームスポーツへの調査の移行について学ぶことができました。そして、第3次メンタルマネジメント研究プロジェクト(1993-1995)では、ジュニア選手のメンタルマネジメント、優秀指導者のコーチングに関する調査、認知的能力の向上を目指したトレーニングの開発、メンタルトレーニングビデオの作成のお話をいただき、勝利主義(結果)の観点から教育主義(過程)の観点への移行があったことを学びました。最後に、第4次メンタルマネジメント研究プロジェクト(1996-1999)の紹介があり、冬季種目のメンタルマネジメント、長野オリンピックに向けての心理的サポート、冬季種目のためのメンタルマネジメントマニュアル作成の詳細をお話しいただき、オリンピックと共にメンタルマネジメントの発展があるのだと実感することができました。

今回のキーノートレクチャーを通じて、日本のメンタルマネジメントの発展の背景を知ることができました。これらの背景を辿っていくことで、猪俣先生を始め、諸先生方のこれまで積み重ねてこられた情熱や功績を改めて再認識する機会となりました。また、それらを色褪せさせることなく次世代に受け継ぎ、私自身、引き継いでいけるように研究に現場の実践にと、より一層尽力していきたいと身を引き締める思いとなりました。このような貴重なレクチャーを拝聴することができ嬉しく思うと共に、猪俣先生に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

司会報告

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育心理専門領域のシンポジウムを企画するにあたり、これまで2年間に渡って取り上げた「チーム力」に関する検討を続けたい、と言う思いが大会企画担当の委員にはあった。しかし東京でのオリンピック・パラリンピック開催が決まり、日本体育学会第66回の大会テーマも「2020東京オリンピック・パラリンピックと体育・スポーツ科学研究」となった。今後5年間はおそらく国際競技力向上に焦点を当てた研究が一層活性化すると予測される中、どうしても今のうちに熟考しておかなければならないテーマがあると強く感じていた。それがジュニアトップアスリート育成に関わる問題である。

2020東京オリンピック・パラリンピックを控え、卓球やレスリング、フェンシング等、わが国のジュニアおよびユース年代にあるトップアスリートの活躍は目覚ましい。彼らを生み出した育成システム（タレント発掘、一貫指導体制、エリートアカデミー、他）と彼らの国際競技力を支える体育・スポーツ科学研究にも注目が集まっている。もちろんここでは、試合場面での実力発揮のための心理支援等を含め、私達体育心理専門領域も一定の貢献を収めてきた。

しかしわが国でのオリンピック開催は夏冬合わせればすでに4回目。スポーツ文化の成熟に伴い、2020に向けてジュニアトップアスリート育成に果たす体育・スポーツ科学研究の役割も多様化しており、競技力向上への支援だけでは不十分である。たとえば、ジュニア年代にあるアスリートの心身の健全な発育・発達を保障する支援体制はもとより、デュアルキャリアを達成する教育のあり方など、本専門領域から発信し体育学会の専門領域の垣根を越えて検討すべき課題は少なくない。もちろん、指導者の資質向上も重要な課題である。

シンポジウムでは、勝田隆先生よりスポーツ庁設置をにらみ、今日本のスポーツの状況をどう見るかが問いかけられた。その後国際的な視点から日本スポーツ振興センターが見据えるわが国の体育・スポ

ーツ界が進むべき方向を示していただいた。

続いて、杉田正明先生よりジュニア・ユース年代にあるアスリートの実態や課題について、日本オリンピック委員会のスポーツ科学サポート部門の調査・分析結果をご報告いただいた。そこでは、「ユースオリンピックゲーム（YOG）参加選手のその後の状況」として、2010年のシンガポールYOG出場選手のうち、約半数がその後も活躍している一方で、すでに22.5%の選手が引退している状況が説明された。

そして最後に、オリンピック（メダリスト）でもある田中ウルヴェ京先生より、体育・スポーツ心理学の立場からこれらの課題に現在各関係機関がどのように取り組んでいるのかを整理してご報告いただいた。その中でもアスリートがアスリートとしての卓越を目指す中で、いかに一人の社会人としてキャリアを達成していくかを支援するシステムの重要性を指摘された。

3名のシンポジストのお話はいずれも刺激的で、これまでの常識に疑問を投げかけるものばかりであった。たとえば田中先生のお話を聞きながら、競技力に打ち込む傍らで引退後のキャリアを考えながら過ごすのは、非現実的であると感じていた自分を再発見した。むしろ、競技での卓越を目指してとことん突き抜けて進む先に、アスリート経験を本当の意味で生かせるキャリアがあるべきである、という考え方は今後の育成システムを考える上で大変参考になるだろう。また、体育心理専門領域はそれを裏支える工夫も考えていかねばならぬ。フロアーからも活発なご意見を頂き、2020を目指しつつ、2020の先にあるべきわが国の体育・スポーツ教育やスポーツ文化の姿をも視野に入れた議論を、存分に楽しんだ2時間であった。

なお当日の様子は、コーチング・クリニック11月号（ベースボールマガジン社）にも掲載されていますので、関心のある方はあわせてご覧いただければ幸いです。

演者報告「国際的視野から見たわが国の体育・スポーツ科学研究について 国際競技力向上に関する実践的立場から考える」

勝田 隆（国立スポーツ科学センター）

1. はじめに

2011年「スポーツ基本法」が誕生し、2015年には「スポーツ庁」がスタートします。そして、2020年には半世紀ぶりに「オリンピック・パラリンピック東京大会」が日本で開催される。このような状況から鑑み、私達、体育・スポーツ関係者は、歴史的な転換期に立ち、そして、スポーツの未来に対して、大きな責任を預かっています。まず、その認識を会場の皆様と共有したいと述べました。

2. オリンピック・パラリンピックに向けたプログラム

自国開催のオリンピックやパラリンピック大会において、国民の期待を一身に集める開催国のメダル有望アスリートたちは、大会時に、あるいは、その後の人生において、それまでとは異なった特別な重圧を受けることは容易に予測されます。

このような状況が予測される中、日本の体育・スポーツ科学研究は、今、どのような取り組みを模索し、また具体的に開始しているのか、その動向に対して注視しています。ここでは、従来の体育学の領域を超えた実践的な諸外国の取り組みを二つほど紹介させていただきました。

一つ目は、欧州の取り組みです。欧州では「Sport Psychology」から「Performance Behavior」というコンセプトや、そのコンセプトに基づいた具体的な取り組みが始まっています。この取り組みは、ヨーロッパ・スポーツ心理学会（FEPSAC）会長でもあるP. Wylleman博士が中心となって行っているもので、主にオランダで展開されています。ポール博士は「本来のSport Psychologyの守備範囲は、リカバリー、傷害予防、栄養、ライフスタイル等もっと広いもの」「心理学的支援は行動に影響を与え、それがパフォーマンス向上に寄与するものでなければならない」との考えから「Performance Behavior」を提唱したと報告しています。（野口：JSC. 2014）

二つ目は、オーストラリアスポーツ研究所（AIS）の取り組みです。AISでは、5年前から豪州

の特殊部隊と協働してトップアスリートに適用した「AISコンバットセンター軍隊トレーニングプログラム」を開発している。このプログラムを開発した生理学者のDavid Martin博士はトップアスリートと特殊部隊の兵士の心理学の研究において忍耐力、度胸、内因性動機づけがメンタル面で共通して求められることから、「心理的限界を超えるストレス環境下を意図的に作ることで、競争力を高める効果がある」述べています。（衣笠，藤原：JSC. 2014）

3. 未来にコミットする当事者意識と危機感をもつ
自国開催のオリンピック・パラリンピック大会は、開催国に大きな変化をもたらす絶好の機会とされています。これは単にスポーツの発展を意味するのではなく、スポーツにかかわるアスリートをはじめとした多くの人々の人生に好影響を及ぼすことを含んでいると、私は捉えています。

その一方で、社会や組織が危機的状況に直面した場合にも、大きな変化が求められます。いわゆる有事に直面した場合です。

日本のスポーツは、今、オリンピック・パラリンピック大会の自国開催という大きな変化をもたらす絶好の機会の中にあり、同時に少子化や子どもたちのスポーツ離れ、情報化・グローバル化による価値観の多様性、ドーピングや八百長による試合の不正操作といったスポーツ・インテグリティに関する問題など、さまざまな危機的状況にも直面しています。このような状況において、私たち体育・スポーツ関係者には、当事者意識と危機意識を持つことが必要とされ、同様に、歴史的変化と激動の時代を好機と捉え、コミットするための実践的アクションも求められていると思います。

私たちは未来からスポーツを託されています。2020に向けて、そして2020年を超えて、次代にしっかりとバトンをつなげられるように、「今」に関わっていききたいというメッセージを持って発表させていただきました。

演者報告「ジュニア・ユース年代にあるトップアスリートの追跡調査」

杉田正明（三重大学）

JOC情報・医・科学専門部会では2013年度に「トップアスリート育成のための追跡調査報告書〈第一報〉」を取り纏めて公刊した。これは、ユースオリンピック競技大会（YOG）の第1回夏季大会（シンガポール）（2010）に参加した日本選手団（選手、役員）を対象としたアンケート調査およびヒアリングを通してユースオリンピック出場選手からみるジュニア競技者の競技力向上の方向性について検討したものである。回答数は選手55名（77.5%）、指導者19名（76.0%）であった。さらに2014年度には第1回YOG冬季競技大会（インスブルック）の日本代表選手団を対象として同様の調査を実施した。回答数は選手32名（100%）、指導者13名（100%）であった（第二報として公表）。

ここでは、それらの調査結果に基づくジュニア・ユース年代にあるトップアスリートの現状を報告することとしたい。

競技開始年齢と夏季・冬季競技別の違い

専門競技を開始した時期を、7歳以前（超早期群）、8～12歳（早期群）、13歳以降（後期群）の3つに分類したが、夏季競技の場合、全体的には超早期（18.2%）・早期群（52.7%）に多く分布していたが、後期群に多く分布している競技には、ウエイトリフティング、アーチェリー、セーリングなどであった。オリンピックを対象とした先行研究（Vaeyensら、2009）では、技術的要素が強く影響する競技種目は早期から開始されている傾向があるとされており、今回の調査によっても同様の傾向が認められた。一方、冬季競技では、超早期群が34.4%と夏に比べて2倍程度高い結果を示した。スキー（フリースタイル）、ボブスレー、スケルトン、カーリングの選手のように、後期もしくは早期群に属している競技もみられるが、全体的には冬季競技のほうが夏季に比べて幼少期から競技を開始する傾向

が強かった。

幼少期のスポーツ経験

幼少期のスポーツ経験について、6歳までに経験した日本人のジュニアトップ選手の種目数は、比較的少なく、冬の超早期・早期群の平均は2種目強であったが、夏は2種目に満たない結果であった。Vaeyensら（2009）のオリンピックを対象とした先行研究（ 3.3 ± 1.6 種目）と比較すると、日本人のスポーツ経験数はどの群においても比較的少ないといえよう。そして6歳までにスポーツ経験の全くない選手も、16～22%ほどみられた。特に超早期群は7歳までに専門競技を始めたグループであるため比較的幼少期のスポーツ経験は少ないと予想されたが、冬季の超早期や早期群の選手は専門競技や関連する冬期競技だけでなく、水泳、サッカー、野球、体操など多様なスポーツを経験していた。

冬季競技の実践的練習の期間は限られていることが影響しているものと推察されるが、超早期および早期に専門競技を開始する選手は、低年齢から多様なスポーツに取り組む姿勢がみられていることは非常に興味深い結果である。

トレーニング実施について

トレーニングを最も多く行った時期を聞くと、夏季超早期群では15歳、早期は16歳、後期は17歳。そして冬季では、概ね約1年遅い結果であった。同様に、ケガが多かった時期もそれぞれ重なっていた。特に超早期群と早期群は、早くからトレーニングを多く行っていることによって、高校生期に外傷・障害発生件数が増えており、また夏季、冬季の選手に困難だったことは何か聞くと、ケガや不振を挙げた選手が数多くみられた。高校時代は国際大会への予選やシニア大会への出場機会が増え、心身の成長が適応しきれない局面に遭遇する場面がみられた。ま

た、高校と大学における環境の違いや所属クラブの変更など、練習環境が変わるときに困難な場面に直面する選手もみられた。こうした状況の中、ほとんどの選手が各種スポーツ医・科学サポートは必要である（60～100%）と回答しているにもかかわらず、全員が2回未満の各医科学サポートへのアクセス回数であった。冬期競技・夏期競技問わずユースオリンピックに参加するレベルの競技力をもったジュニア・ユース選手のさらなる競技力向上のためにスポーツ医・科学サポート拠点へのアクセシビリティを高める必要性が示唆されるとともに、全般的な医・科学サポート態勢を充実させる必要があるといえよう。

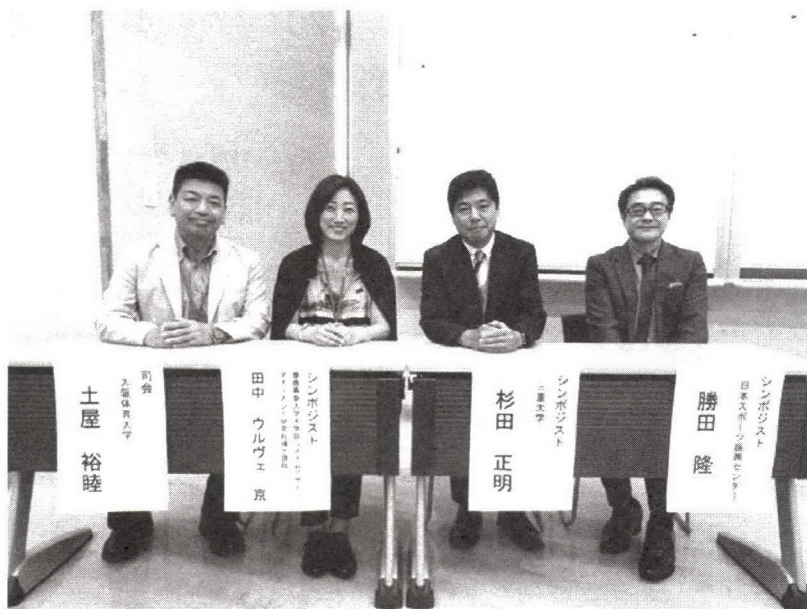
競技歴およびYOG後の競技成績

夏季では、必ずしも高いパフォーマンス発揮（日本代表選出年齢）の低年齢化が、シニアレベルでの高いパフォーマンス発揮年齢（世界選手権やオリンピック出場年齢）と強い関係を有しているわけではなかった。しかし、冬季では世界選手権やオリンピック初出場年齢は、超早期群＝早期群＜後期群であったことから、ジュニアレベルで好成績を積み重ねることが、シニアレベルの競技力にも影響するものと推察された。

と推察された。

ユースオリンピック参加からおおよそ2年半から3年半の間に、夏季選手の25.5%、冬季選手の15.6%が現役引退していた。引退の理由は様々であったが、現実の世界レベルを経験し、引退して就業した者もいたことから、ユースオリンピックがキャリアを見直す一つのきっかけになったと思われる。そのため特にユースオリンピック前後のデュアルキャリア教育などアスリートライフスタイルの必要性が示唆される。ユースオリンピック参加後の状況を指導者に聞いたところ、夏と冬ともに約5割の選手の競技力は向上していることが明らかとなった。この傾向は「停滞している」選手の割合も同様であり、競技成績が停滞している理由として「ケガ」、「環境」、「身体変化」が挙げられていた。

南京（2014）、リレハンメル（2016）ユースオリンピック代表選手の調査を継続しており、引き続き、ユースオリンピック代表選手からみるジュニア競技者の競技力向上の方向性について検討していく予定である。



司会&シンポジストの先生方

演者報告「トップアスリート育成に関わる体育・スポーツ心理学研究者の役割」

田中ウルヴェ京（慶應義塾大学大学院SDM研究科博士課程）

2020東京オリンピック・パラリンピック大会を控え、わが国のトップアスリート育成においては、体育・スポーツ科学研究の専門分野を超えたチームワーク体制の整備がさらに求められている。

体育・スポーツ科学研究の各分野の研究者、実践者が、オリパラ開催を機に、国際的な視野をもって次世代に受け継ぐ「知」を集積、共有、発信していくために、本発表では、トップアスリート育成に関わる体育・スポーツ心理学研究者の役割について示した。

本発表では、まず、トップアスリート育成に必要な体育・スポーツ心理学研究とは何かについて、演者の元選手、元コーチの視点から示した。ここでは、特に「競技で結果を出すため、そして、たとえ負けても完全燃焼感を持てるためのあらゆる科学的なアプローチ」の情報収集と実践を、選手およびコーチは必要としていることを改めて具体例とともに示した。そして、それをふまえて、強化育成現場における体育・スポーツ心理学研究者の国内の現状を役割とともに示した。このなかには、2008年から行われているJISSでの心理サポートや、JOCキャリアアカデミーの現状、また、JSCが現在、研究開発している体育・スポーツ心理学領域に関するプロジェクトのいくつかを示した。特に「アスリートライフスタイル」「デュアルキャリア」「高次能力開発」といった言葉の定義とともに、コンセプトの内容などを簡単に示した。

最後に諸外国のNOCなどが行っている体育・スポーツ心理学領域の既存事例をふまえながら、新たな体育・スポーツ心理学研究者の役割を提言した。特に、わが国では、本格的な体制の整備が急務となっている新たな2軸、「アスリートのキャリアを包括的にシステムとしてとらえ、木も見て森も見ながら関わっていくキャリアアドバイザー的な役割」と「体育・スポーツ科学研究を基盤としてアスリート

のアントラージュに横串を通して関わるパフォーマンスディレクター的な役割」について述べた。

選手は、いつか必ず第一線を退くという意味の競技引退をむかえる。選手にとって、現役時代は勝つことが大事であり、常に目標を持って、前に突き進むメンタルが求められるが、選手生活が終わってからは、それまでのメンタルとは種類の違うメンタルにも気づいて行くというトランジション期間が必要になってくる。引退後は、そのなかで、「選手ではない私は誰だ?」といったセルフアウェアネスとともに、人生哲学的なことも抜本的に見つめ直すことにもなる。

そもそも人生において「成功とは一体何なのか」といったことにも自己内省する期間が重要となるのが、引退後の数年、十数年だ。Athletic identityの喪失などを含めた、アスリートのキャリアトランジションにおける心理葛藤においても、まだまだ我々研究者にできることはたくさんあると考える。現役時代でのスポーツ経験における醍醐味は「勝つこと」だけでなく、しっかり「挫折を味わうこと」ができ、「あからさまに負けられること」でもある。そういった選手の心の振れ幅を、多角的なアプローチで、様々な分野の研究者が協力して、サポートしていければと思う。最後に、本シンポジウムの発表では、大変貴重な機会を頂きました。改めましてありがとうございました。



シンポジウム会場の様子

傍聴記

中須賀巧（福山平成大学）

今回のシンポジウムは、2020東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、ジュニアトップアスリート育成に果たす体育・スポーツ科学研究の役割がテーマであった。虎視眈々と迫る問題について考える機会を頂けたという思いから大変興味深く拝聴させていただいた。

まず司会である土屋裕睦先生（大阪体育大学）から「5年後、我々が迎える2020東京オリンピック・パラリンピックに向けてジュニアやユース年代のトップアスリート育成に対して専門領域の垣根を越え、多様な側面から考える」という趣旨が説明された後、3名のシンポジストの発表に移った。

はじめの勝田隆先生（日本スポーツ振興センター）は、国際的な体育・スポーツ科学研究の情勢について発表されており、わが国のトップアスリート育成システムをより充実させることが課題として挙げられていた。また、兵士のトレーニングプログラムをトップアスリート育成に援用したコンバット・トレーニングの貴重な動画を拝見した。これは、劣悪な状況の中でトレーニングを行い、その体験を振り返り、考えさせるというものであった。発表の最後には、“私たちは未来からスポーツを託されている”というメッセージとともに、自国開催に向けて我々一人ひとりが関係者であるという立場で十分に準備をしておく必要があるという言葉が印象に残った。

次の杉田正明先生（三重大学）は、ユースオリンピック競技大会に参加した日本代表選手団から継続的に収集した基礎データに基づき、ジュニア・ユース時代にあるトップアスリートの実態や課題について発表された。そこでは、競技大会3年後、約半数の選手はパフォーマンスが向上していると判定されているが、20%以上の選手は既に引退しているという実態は印象に残った。ジュニア・ユース年代にあるトップアスリートが、その後どのような道を歩む

のか、競技引退後の生活に対してどのようなサポートができるのかを改めて考えていく必要があると感じた。

最後の田中ウルヴェ京先生（慶応義塾大学大学院）は、トップアスリート育成に必要な体育・スポーツ心理学研究とは何かについて元選手、元コーチの視点から発表された。特に、トップアスリート育成に関わるスポーツ心理学者には、勝利と完全燃焼感の両方を達成するための心理的側面（stress hardiness, adversity coping, self-control）と哲学的側面（self-awareness, life roll, confidence）のエビデンス提示が求められていることが伝わってきた。また選手の人生は競技引退後も続く、つまり成功って結局、何か？という問いに考えさせられた。我々研究者はしっかりとエビデンス提示しながら問題解決に応えなければならないと改めて感じる事ができた。

その後、フロアの先生方から質疑があった。特に阿江美恵子先生から「子どもがスポーツをするのか迷ったとき、スポーツを選択できるような魅力を伝えることが重要であり、多数選択肢がある中で無理やりスポーツの道に進ませる子どもを作ってしまうのではないか」という懸念は共感できるものであった。

今回のシンポジウムを通して、2020東京オリンピック・パラリンピックに向けたジュニアトップアスリートの育成、そして、その後のキャリアについて課題や問題が山積しているのは間違いないと感じた。今後、ジュニアトップアスリートに関して十分なデータを蓄積していく必要があり、学際的研究の発展が求められているように思う。

座長報告

渋谷崇行（桐蔭横浜大学）

夏の暑さがいくらか和らいだ、心地よい朝の空気を感じながら国士舘大学に向かいました。大会初日の午前には口頭発表①が行われ、2 演題の座長を務めさせていただきました。

最初の発表演題は、有富公教先生（筑波大学大学院）による「練習に対する動機づけの高低による練習中の心理状態の違いについて—練習中の認知と感情に着目して—」でした。選手のやる気がある時とない時とで選手の認知や感情がどのように異なっているのかが検討されました。具体的には大学生競技者にやる気がある時とない時をそれぞれ想起してもらい、その時の「考え（認知）」「感情」、そして「目標達成度」が調査されました。その結果、両場面において特徴的な認知と感情との対応関係がみられ、また、目標達成度とも関連があるとのことでした。フロアとは、性差の検討の必要性や研究方法に関わる質疑応答がありました。

つづいての演題は、西村拳弥先生（びわこ成蹊スポーツ大学大学院）による「子どものやる気に拍車がかかるとき—運動遊び場面への質的アプローチ—」でした。運動遊び場面における子どものやる気の変容について参与観察によりデータ収集を行い、それらをエピソード記述によって質的にアプローチした研究でした。結果として、子どもは注視されることでやる気が高まるということでした。フロアからは、注視して欲しくない子どもも存在すると思うが、そうした子供をどう捉えたらよいのかということや、子どもが注視されてやる気に拍車が掛かるまでに内面の変容過程をどう分析できるのかということの議論が交わされました。

このセッションは大学院生による発表でした。そこで、これからの若手研究者に向けて口頭発表を行う魅力についてご報告できればよいと考え、発表者であるお二人に口頭発表後にいくつかの質問をさせて頂きました。

まず、口頭による発表を選択した理由についてお聞きしたところ、有富先生は「ポスター発表よりも研究の背景や目的を伝えやすく、より多くの方に発表テーマの領域に興味を持っていただけるから」ということでした。また、西村先生は「プレゼンテーションの際に実際の映像を提示することで、分析内容に関わるディスカッションが効果的にできるから」ということでした。口頭発表は多くの聴衆を前にすることから独特の緊張感がありますが、自身の研究内容を広く、そして視聴覚機器を使用して伝えられるというメリットがあります。そうした機会は積極的に利用したいと思いました。

また、口頭発表の手ごたえについて、有富先生からは「セッション終了後に、『実感の伴った理解を得られた発表』『自分の実践に役立つ情報を得られた』など、聴衆から肯定的な感想を頂きました」との言葉を頂きました。また、西村先生からは「自分とは違う視点から指摘を受けることができ、これから研究を行ううえでどの様な観点から分析を行うことが大切なのかを考える機会になりました」との感想を頂きました。各先生が、今回の発表から今後の研究活動につながる成果を得られたようで、このことは座長として大変うれしいものでした。これからの博士論文、あるいは修士論文の作成に役立てほしいと思います。また、若手研究者の皆さんも積極的に口頭発表に挑戦して、準備から発表までの過程から多くの収穫が得られることを期待したいと思います。

最後に積極的に議論にご参加頂いたフロアの皆様に感謝を申し上げます。

座長報告

山田憲政（中京大学）

学会初日8月25日、10:40分からの一般口頭発表3題の座長を担当した。初日で朝一番ということもあり、出だしこそフロアの人数は疎らだったが、途中からは立ち見の人が出るほどの反響のあるセッションだった。それもその筈、この3題は、今回の体育心理学、いや体育学会全体を通して、ひととき新しく高度な時系列解析をスポーツの中に取り入れて、その現象に潜む法則性を探ろうとするものだったからだ。その新しさを嗅ぎつけてか、フロアには、心理学だけでなくバイオメカニクス領域の研究者も見られた。ただ残念なことは、その新しい概念を伝えるには15分という発表時間がどの演題でも十分ではなく、発表内容がフロアに上手く伝わったかという、なかなかそうは行かなかったことだ。そして、質疑応答がどれも時間切れで終わってしまい、本質的なディスカッションには到底行き着けなかったことだ。

さて、具体的な研究に入ろう。最初の平川先生（南山大学）は、「競漕選手による漕周期の長期相関と $1/f$ 型ゆらぎ」について発表された。1990年代から始まった歩行やタッピングの時系列データからハースト指数を求める研究やこの研究を理解するには避けては通れないフラクタルの概念を説明され、さらにその後のこの研究分野の発展を紹介しながら本研究の位置づけをされた後、本題に入られ、最終的に、競漕選手がボートを漕ぐ周期的な動きに、履歴性があることを明らかにされた。つまり、周期的と言っても詳しく見ると速くなったり遅くなったりしており、その変化の仕方がランダムではなく、ある法則性を持ち、さらにそれが時間的に離れた場面でも現れることを実験データから導いたのである。実験データの解析は緻密であり、プレゼンの図も几帳面で奇麗であった。フロアからは、その履歴性の大きさが動きの制御の中でどのような意味があるのかを問う鋭い質問や、外部周期音との関係をどのように検討するかといった方法論に関する質問がなされた。平川先生は、今後の課題も含めて回答されていたが、時間切れで終わってしまったのが残念である。動きのデータの非線形時系列解析が進み、身体運動が非線形ダイナミクスで近似できることが明らかにされて来ているが、今後は、運動制御の中でその意味を明らかにしていかなければならないことが実感できる、ご発表と質疑応答だった。

次の横山先生（名古屋大学）は、集団的ダイナミクスに関する新進気鋭の研究者で、その分野で国際論文を多数持つ山本先生（名古屋大学）との共同研究ということもあり、彼女らの最近の研究の進展が期待される中でのご発表だった。演題は「ゲームとチームのリズムに潜むマルチスケールダイナミクス」であり、これも前演題と同様に、マルチスケールという難しい概念の説明をされて本題に入られた。いつものことながら、発表されたデータは、サッカーの試合の選手の動きとボールの動きを根気強くデジタル化した貴重なものであることにまずは敬意を表したいと思うのである。このような地道な実験と分析を経て、目に見えないがゲームスポーツの中で本質とも言える、ゲームの「流れ」の生成のメカニズムにメスが入れているのである。さて本題は、ゲームの「流れ」をチームの攻守の切り替わりという大きなスケールと、選手間のパスで生成されるチームの小さなスケールに分け、その2つのスケール中に、

周期の異なる2つのリズムが存在し、その2つが推移するという、両スケールに本質的に同じ仕組みがあるという発見を発表されたものであった。フロアの意見をまとめると、選手が意図的に動いているリズムが、研究者が見つけたダイナミクスに支配されているという見方、つまり選手内部と研究の視点（外部）という観点についての議論だったと言えるだろう。これは非常に難しい問題であり、人間を対象とする体育学会全体に対する問とも言えると思う。それが、ゲームの流れの定量化では、際立って目立つ本質的な疑問として立ち現れるのである。点がどのように取られるか、あるいはボールがどのように移動するのか、といった旧態依然としたゲーム分析が多い中、ゲーム中の人の動きのダイナミクスの分析がなされ、さらにその分析に力学系解析を導入され、外部の視点から「流れ」が見え始めている、これは画期的なことである。しかし、内部の人間の知覚・運動特性を入れた、ゲームの流れの解明へと、今後の発展が期待されるご発表と質疑応答であったといえる。

最後の藤井先生（名古屋大学）も、集団スポーツ（バスケットボール）ゲームに潜む法則性を実験データから検討したもので、演題題目は「球技における見方を助ける行動-空間マルチスケール性に着目して-」であった。前演題と同様に山本先生（名古屋大学）との共同研究であり、さらに東海大学でバスケットボールの実技指導もされている小山先生、陸川先生のお二人先生と、バイオメカニクスを専門とされる山田先生との共同研究であった。つまり、理論的な研究者と実技指導をされている研究者のコラボレーションと言え、体育学では非常に重要な共同研究の形態と言える。発表内容は、1対1の最初の空間スケールから、5対5の最大のスケールまでをゲーム中の選手の動きから分け、それが得点とどのように繋がるかと言った観点から分析がなされていた。スクリーンの対処、パスを出すタイミングなど、これまで経験と勘で養われて来たバスケットボールの戦術を人の動きのダイナミクスから評価しようとした画期的な研究といえる。結果は、2対2のミドルスケールの重要性が導かれるものであった。発表は、動画や懇切丁寧に作られたグラフィカルな概念図が示され、初めて聞く人にも分かりやすく伝えようとする試みが随所に見られ、非常に好感の持てるものであった。ここでの質問も研究者が外部から定義し分離する行動が、内部にいる行動する選手の目的と同じなのかという本質的で鋭いものであった。ゲームに潜む法則性を明らかにする研究は非常に重要であり、それが始まった当時は画期的であった。しかし今ここに来て、新たな問題に直面しているのかもしれない。つまり、ゲーム中の内部にいる選手が何を知覚して、そして何を目的に動いているのか、それを外部から定量化するものと同一視してよいのかという問題といえるだろう。

以上、3題に共通することは、スポーツ中の複雑な動きに、自然現象を解明する姿勢で向き合う、際立って学際的なものであるといえる。しかしそこには、生命あるものの動きを解明しようとするとき、必ず立ち現れる、内部と外部といった非常に難しい問題がある。しかしその問題は、いかにしたら克服できるのか？という課題にもつながり、私だけでなくフロアの皆さんにとっても、次の研究への意欲が湧く非常に刺激的な研究発表であったと思う。

座長報告

永山貴洋（石巻専修大学）

大会初日の口頭発表③の座長を担当させていただきましたので、ご報告させていただきます。本セッションにて発表されたのは、藤本晋也先生（仙台大学）、岩浅巧先生（順天堂大学大学院）の2名の先生でした。発表時間は15分で、その後5分間の質疑応答の時間が設けられました。尚、質疑応答は、演題ごとに行いました。

まず、藤本先生の「ジュニア期アスリートのスポーツ競技種目選択に対する認知構造について」は、ジュニア期にあるアスリートが競技種目の選択行動に対してどのような認知構造をもつのかについて明らかにすることを目的としたご発表でした。小学校高学年の児童63名を対象とした調査結果から、種目選択の認知構造を説明するものとしてスポーツの目標設定に関する因子、選択に対する自己投入の因子、スポーツ競技種目に対する模索に関する因子、及びスポーツ種目選択に対する悩みに関する因子の4因子が見出されたことが報告されました。質疑応答では、フロアの先生から子どもが種目を選択するにあたって、介入の度合いが影響するのではないかと質問がなされました。また、座長の立場から、子どもたちが自律的に種目を選択するためには、外部からの情報提供が必要だという藤本先生の説明に対して、情報提供の方法によっては、自律的な種目選択を阻害してしまうことがあるのではないか。情報提供の際に、注意している点について質問させていただきました。藤本先生からは、2つの質問に対し、事業を実施している行政や保護者との関係から、子どもの自律的な行動を阻害されそうな事態が生じた場合は、その都度対応しているとの説明がありました。小学校から中学校に進学する際の種目選択は、その後の運動発達にとって重要な意味をもつと考えられ、今後の研究成果を期待したいと感じました。

続いて、岩浅先生による「スポーツによるまち興しの可能性ー地域住民のスポーツイベントに対する

価値意識に関するフィールド調査ー」は、スポーツイベントによるまち興しの可能性についてのご発表でした。地域の産業イベント、祭り、スポーツ大会に参加した地域住民1,353名を対象として、性差や世代差はあるものの、調査を実施した地域ではスポーツイベントに関連する施策が支持されたことが報告されました。質疑では、フロアの先生から質問が出なかったことから、地域住民がスポーツイベントに興味があることは価値意識が高く、その意識の高まりが住民のコミットメントにつながるという説明に対して、座長の立場から価値意識の高まりをどのようにコミットメントへつなげていけばよいのか質問させていただきました。岩浅先生からは、今後の検討事項だとのこと説明をいただきました。ご発表の中で、スポーツイベントの中でも、スポーツ大会やマラソン大会の順位が上位だったのに対し、カヌー大会が下位だったことが興味深く思いました。

発表された先生方には、拙い進行によりご迷惑をおかけしましたが、進行をサポートしていただいた会場系の皆様、ご参加いただいたフロアの先生方、そして発表された2名の先生方のおかげで無事に座長をつとめさせていただくことができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

座長報告

國部雅大（筑波大学）

8月25日（火）、大会初日の午前11時40分から、口頭発表セッション2演題の座長を担当させていただいた。やや広めの会場ながらも、直前のセッションに続いて空き席は少なく、フロアには多くの参加者がみられた。

1題目は長谷川弓子先生（名古屋大学）による研究発表で、演題名は「ゴルファーのパッティング距離に対する認識と行為の分化」であった。

パッティング課題は、非常に微細な「ターゲットの位置に関する見積もり」と「その見積もりに応じた運動」の両方に正確さが求められることに着目し、10通りのパッティング距離（0.6～3.3m）において隣接する距離間のピーク速度データの比較をもとに、プロ選手がアマチュア選手に比べ、距離のわずかな違いを識別してそれに応じた正確な運動を生成できるという知見が示された。また、成功確信度、スコア、インパクト時のクラブフェース角度にはプロ選手とアマチュア選手の間で差がなかったが、クラブのピーク速度の変動係数および加速度プロフィールのRMSEは、プロ選手においてアマチュア選手よりも小さかったことから、プロ選手はアマチュア選手よりも一定のパターンで運動を生成していることが報告された。

質疑応答において、今回の研究では試行前に成功確信度を聞いていたが、視覚遮蔽などを用い毎回のパッティング直後の成功確信度を調べるとよいのではないかという意見が出された。また、隣接するパッティング距離間のピーク速度の変化によって行為が変化したかどうかを調べる際に、距離と線形でみていく理由についての議論がなされた。

2題目は天野勝弘先生（朝日医療学園）による研究発表で、演題名は「認知機能向上システム（ニューロトラッカー）実施中の脳波」であった。

ニューロトラッカーとよばれるシステムは、モニターを用いて2次元あるいは3次元的に提示された

映像中を移動する複数の物体のうちいくつかの標的についてそれらがどこに移動したかを追跡するもので、スポーツ選手の認知機能向上訓練においても利用されている例の紹介があった。発表では、このシステムによる課題実施中の脳波を測定し、提示映像（3次元／2次元）と姿勢（立位／座位）の各条件での脳波データ中にみられる周波数帯域を比較することで、本課題特性に関する検討が行われた。その結果、3次元座位条件において、2次元座位条件に比べてSMR（ローベータ）成分が大きかったことや、シータ波やベータ／アルファの値においては差がみられなかったことなどが報告された。

質疑応答においては、主に注視および眼球運動と脳波データの関連性についての議論が行われた。脳波測定中に用いた課題が視線移動を伴うものであることから、注視点設定の必要性に関する議論や、眼球運動が脳波データに与える可能性やその影響についての議論がなされた。また、これらのシステムで長期的に訓練を行うことによる効果に関する議論も行われた。

本セッションでの研究発表の内容を総合すると、運動や行為に関わる知覚および認知の過程を明らかにしようとする枠組みでの研究であるように感じた。その中で、実験や測定を行う際の条件設定や分析手法に関しての活発な質疑応答がなされ、今後の研究の発展が期待される内容となった。

発表者の両先生方をはじめ、本セッションの進行にご協力くださったスタッフの方々とフロアの参加者、および質疑応答で貴重な御意見をくださった先生方に、感謝を申し上げたい。

座長報告

佐々木万丈（日本女子体育大学）

大会二日目（8/26）、午前中に行なわれた口頭発表の第1セッションの司会を担当した。演題及び発表者は以下の通りであった。

【ライフスキル獲得を促すスポーツコーチングスキルの検討ー考える力を育成するコーチングに着目してー：壺阪圭祐氏（兵庫教育大学大学院）】【大学生トップアスリートにおけるライフスキル獲得レベルの経時的変化ー大学4年間を通じた縦断調査からの検討ー：島本好平氏（兵庫教育大学大学院）】

壺阪氏は、選手がスポーツ活動を通してライフスキルを獲得する場合の有効なコーチングスキルの普遍的内容を明らかにする必要があると指摘し、特に選手の「考える力」を育成するコーチングスキルについて検討した。優れた指導成績を有する複数の指導者へのインタビューからは、選手の自主性を重んじ自発的な思考と行動を促すコーチングの重要性が指摘された。質疑応答では、指導者が指摘したコーチングスキルの実際の効果を把握したのかどうかが発問され、確認はおこなわれなかったという回答が示された。また研究のこれからの展開について質問があり、今後の検討課題であることが述べられた。壺阪氏は明確な問題意識を持ち、ライフスキルの育成・発展に寄与するコーチングスキルを検討することの意義と自身の研究知見を熱心かつ丁寧に説明されていた。それゆえフロアから指摘された語りの実態把握に関する作業の必要性についての指摘は、研究方法論上の大きな検討課題になったのではないかと考えられる。

次に島本氏は、スポーツにおいて優秀な成績を残して大学に入学し、その後4年間継続してその競技に取り組み続けた選手が、大学における競技活動を通じて身に着けたライフスキルをどのように経年的に変化させたのか、4年間の縦断調査の結果を報告した。反復測定分散分析の結果からは、「目標設定」や「考える力」など11のライフスキルのうち、

「体調管理」を除く10のスキルの獲得レベルが漸増しており、大学における高度な競技活動のライフスキル促進効果が示唆された。質疑応答では、スポーツ活動との関係が具体的に明確になっていないことや、調査期間中の試合結果などとの関連も検討しなければならないなどの意見が出された。これに対して島本氏自身も、厳密な検証の必要性を述べられた。スポーツ活動がライフスキルの形成と発展にどのように関係するのかを検討するため、同一の調査対象者から時系列にデータを集めその変化を捉えるという方法論は十分に納得できるものである。

しかし一方で、フロアからの意見とも関連するが、何がどのようにライフスキルの形成や発展に関係していたのかを長期の量的データから明らかにしようとする場合、あらゆる要因が同時に多様化するので、何が何に影響したのかの関係は明確にとらえにくくなると考えられる。事例研究などの質的研究は、このような量的研究の限界をクリアする方法として有効なのではないだろうか。

スポーツ選手のライフスキルに関わる研究は、内容については一定の成果を得ていると思われ、今後は両氏が着目するような変容に関する研究知見の蓄積が重要になっていくものと思われる。今回の研究発表からは、そのための方法論上の示唆が得られたのではないかと考える。

最後に、当日の有意義な議論にご参加・ご協力を頂いたフロアの会員各位に感謝を申し上げたい。

座長報告

中本浩揮（鹿屋体育大学）

大会2日目の8月26日に行われた運動学習・制御に関する2演題の口頭発表について報告する。

1つ目は、関矢寛史先生（広島大学）による「運動課題を用いたプロスペクト理論の検証」であった。ご発表内容は、人間はリスクを伴う状況で意思決定をどのように行うかについて、行動経済学で発展したプロスペクト理論を運動課題に応用して説明するものであった。この理論は、なぜ我々が非合理的な判断を行ってしまうのかについて、主観的な価値（利得と損失）評価や成功確率から説明するものである。関矢先生は、事象の生起確率がある程度既知である経済と異なり、運動は事象確率が曖昧である点を指摘し、この理論の運動場面への適用可能性について検証することが目的であると述べられた。

運動課題を用いた結果として、プロスペクト理論の中核概念となる損失回避性（同じ価値でも利得より損失を過大評価する）、感応度逓減性（同じ変化でも物理的に価値が小さい時と大きい時では、小さいときに変化を過大評価する）、低確率事象の確率の過大評価（成功確率が低いものに対して、主観的な成功確率を高く見積もる）が認められたため、運動課題にこの理論が適用できると述べられた。質疑では、運動場面で検討する必要性、実験条件を拡張することで理論の新たな発展につながる可能性について議論された。

スポーツでは、常に利得と損失を天秤にかけながら成功確率を考慮して意思決定することになる。例えば、野球の采配において、スクイズの選択は、1点の利得と1アウトの損失を伴う判断であり、成功確率に影響する打者やカウントによって監督の意思決定は異なる。従来の研究ではいかに最適な解を学習させるかに焦点があるが、関矢先生の発表では最適解を人間が認識していたとしても、合理的な判断が常にできるわけではないことを説明でき、他の人間行動の理解にも発展する可能性を感じた。

2つ目は、佐々木丈予先生（広島大学）による「心理的プレッシャーが1歩踏み出し運動の初期姿勢ならびに予測的姿勢制御に及ぼす影響」であった。プレッシャーによる動きの変化はすでに報告されているが、これらの研究は主に運動の主要局面のみを扱っており、準備局面の姿勢制御の知見は少ない。佐々木先生のご発表では、1歩踏み出し運動課題中の姿勢制御（初期姿勢と予測的姿勢制御）を計測した一連の3つの実験が報告された。3つの実験は、素早さ、正確さ、その両方を求めるという課題の3つの要求特性を操作したものであった。

結果として、プレッシャーによって、初期姿勢の矢状面体幹角度は、素早さと正確さの両方を求めたときのみ前傾、足圧中心の動揺（身体動揺）は、すべての要求特性で減少した。予測的姿勢制御では、後方への床反力が素早さを要求した場合は増加、正確さを要求した場合は低下した。以上の結果から、初期姿勢に対するプレッシャーの影響は、課題の要求特性に関係なく生じ、予測的姿勢制御では、課題の要求特性に応じてプレッシャーの影響が異なる可能性があることが示された。質疑では、プレッシャーの与え方やプレッシャーをいかにして定量化するかといった議論がなされた。

プレッシャーによる動きの変化は、主要局面よりも前の準備局面ですでに生じ、またそれは課題要求によって異なるという知見は、あがりの機序を更に深く探求できる可能性を感じた。

いずれの研究もこれまでの研究知見を更に発展させる可能性があり、今後どのように進展するか楽しみに感じた。座長としては、コメントを一つも発言できなかったが、会場に集まった先生方の建設的なご発言と発表された先生の素晴らしい研究に感謝したい。

座長報告

磯貝浩久（九州工業大学）

8月26日に行なわれた、ストレスに関する2演題の口頭発表の座長を務めましたのでご報告します。

1 題目の発表は、日本女子体育大学の榊田沙織先生と佐々木万丈先生による「ボウリング競技においてストレッサーとなる残りピンと感情及び認知的評価」でした。関東学生ボウリング連盟に所属する大学生競技者82名を対象に、質問紙調査を実施して、ストレッサーとなる残りピンの状態を調べ、その際の感情と認知的評価について検討しています。調査の結果、最も不快なピンの残り方は10番ピンのみが残ることでした。その際の感情を調べたところ、競技レベルが高い競技者は低い競技者よりも、自分のパフォーマンスに対する自信が高いため、ストレッサーとなるピンの残り方をすると、強い不快感情を抱き、怒り感情が高くなることが報告されました。また、競技レベルが高い競技者は、残りピンを取れるというコントロール可能性が競技レベルの低い競技者よりも、高い傾向にあったということでした。

質疑では、課題がどの程度ストレッサーになっているのか、研究結果がどのように一般化できるのかなどに関して議論されました。これまでのスポーツのストレス研究では、汎用性を指向しているためか、今回の研究のような具体的な場面に焦点をあてて感情と認知を評価するといったアプローチは、ほとんど行われてきませんでした。そのような意味で、具体的場面を想定してストレッサーとなる状況を特定し、その際の感情と認知を明らかにするという研究アプローチはユニークであると感じました。

2 題目の発表は、びわこ成蹊スポーツ大学の小林拳大先生と豊田則成先生による「ストレスをどのように語るかー大学野球選手を対象としてー」でした。大学野球選手は競技場面だけでなく、大学生活の中でも様々なストレッサーに直面し、それをコントロールすることが重要であることから、ストレスマネジメントをどのように体験しているのかについ

て質的に検討することを目的としていました。硬式野球部員11名を対象として、大学野球選手はストレスをどのように語るのかというリサーチ・クエスションを設定して、個別インタビューを行っています。また、インタビューの前には、ストレスに効果的に対処するためのメンタルトレーニングを講習会形式で実施していました。

結果では、ストレスに対処するためにどのようなことを行っているのか、その結果パフォーマンスなどにどのような変化が生じているのかなどに関して、多くの選手で共通する興味深い内容がみられていました。特に、リラクセーションなどのメンタルトレーニングの技法を活用しているといったことが印象に残っています。質疑では、インタビュー結果に事前のメントレ講習会が影響しているのではないかとといった質問や、今後の研究の展開に関するコメントなどが出されました。具体的なストレッサーを把握して、それに応じた対処方法を明らかにしていくためには、今回の研究のような質的アプローチが重要になると感じました。今後の研究に期待しています。

2つの発表とも、今後新しい展開が期待できる興味深い研究でした。発表された2名の先生、参加いただいた先生方に感謝申し上げ、座長報告といたします。

座長報告

村山孝之（金沢大学）

「タイムプレッシャーは処理資源を必要とする」：
大久保瞳先生ほか（日本体育大学）

この発表では、脳波計測によってタイムプレッシャー（TP）が脳内の情報処理過程に及ぼす影響を調べた研究結果について紹介された。冒頭では、従来の関連研究において脳内の情報処理段階の初期段階である刺激評価段階に着目した研究が少ないこと、そして、事象関連電位、とりわけP300潜時とP300振幅を測定することにより、刺激評価に要する時間（P300潜時）と処理資源量（P300振幅）を評価可能であることが説明された。

状況判断と意思決定が求められるフランクカー課題（一致試行、不一致試行）を用いた実験の結果、TPなし条件下に比べ、TPあり条件下では反応時間が有意に短縮する一方で正答率が有意に低下したこと、さらにはP300潜時が有意に短縮し、P300振幅が有意に増大したことが示された。これらの結果から、TPあり条件下では、刺激や時間に配分される処理資源量の増大と、それに伴う不完全な刺激評価によって、速度を増加させ正確性を低下させるトレードオフが生じた可能性について論じられた。フロアからは、反応時間について、不一致試行のデータが分析から除外されていることについて質疑があり（中本先生@鹿屋体育大）、分析を検討する旨回答があった。

「専門競技の映像に対する処理資源配分量の維持」：坂部崇政先生ほか（日本体育大学）

この発表では、空手の競技選手を対象として空手の競技映像を反復呈示（5回）した際に、選手らの注意が映像に対して向け続けられるかどうかを事象関連電位の測定によって調べた研究結果について紹介された。

主課題は空手の競技映像、および十字図形の試聴であり、二次課題として聴覚オドボール課題が用いられた。二次課題の反応速度や正答率を調べるこ

と、主課題への処理資源量の推移を間接的に調べられる。P300の分析結果から、競技とは無関係の十字図形と比較し、空手の競技映像に配分される処理資源量の方が多く、さらに処理資源量は反復を通して維持されることが確認された。ただし、競技映像に対する主観的な関心度と注意度は反復初期から後期にかけて有意に低下したことが示された。フロアからは、まず、専門競技以外の、すなわち空手以外の競技映像を反復呈示するコントロール条件を作る必要性に関する指摘があり（今中先生）、今後の検討課題であると回答された。また、二次課題に配分される処理資源のように、主課題への処理資源を除いた残りのスเปアキャパシティについて、スポーツ場面では具体的にどのような対象に配分されるかという質疑があった（進矢先生@東京大大学院）。これについては、今回の実験課題が実際のスポーツ場面のような身体運動を伴う課題でないために、本研究の結果から言及することは難しい旨の回答がなされた。また、P300と主観的関心度・注意度の結果が相反するものであったため、そのギャップに対する解釈の可能性についてもより詳細に検討する必要性があると感じられた。

どちらの発表もわかりやすいスライドを用いて丁寧に発表された。事象関連電位の測定は、注意や意識と運動の関係を探るうえで非常に有効なツールである。手続き上どうしても課題の制約はあるが、今後、よりスポーツ場面に近い課題を用いることができれば、関連研究のさらなる発展が期待できると感じられた。

演者報告

小川 茜（広島大学大学院）

8月25日～27日に国士舘大学世田谷キャンパスで開催されました日本体育学会第66回大会に参加させて頂き、また初日にポスター発表もさせて頂きました。会場となった国士舘大学には初めて伺わさせて頂きましたが、キャンパスはどこもとても綺麗で、アクセスも良く、学会期間中大変過ごしやすかったことを覚えています。また大学周辺の徒歩圏内に様々な飲食店があったのも羨ましい限りです。

ポスター発表では、「チームメイト間における衝突行動の生起理由—心理的プレッシャー下における特徴—」という題目で発表させて頂きました。私は心理的プレッシャーがチームスポーツ、特にチームメイト間の連携に与える影響に興味を持ち研究を進めてきました。発表させて頂いた実験研究では、協力関係にある2者が起こす衝突行動を連携の失敗と捉え、その生起回数や生起理由に心理的プレッシャーがどのような影響を及ぼすのかを検討しました。発表会場では、日頃お世話になっている先生から初めてお会いする先生まで、多くの先生方とお話をさせて頂き、ありがとうございました。振り返ると、先生方からの質問に対して十分な返答が出来なかったのではないかと反省するばかりです。しかし、そのようなディスカッションを通して、改めて自分の研究に対して向き合う時間を得ることが出来ました。自分では「まとまった」と思えた実験結果でしたが、先生方から頂いたご示唆を踏まえた上でもう一度見直すと、まだまだ改善の余地が見受けられ、実験結果のまとめ方や今後の研究の方向性を深く考えることが出来たと思います。

また他の先生方の発表を伺った際、私がテーマとする心理的プレッシャーに関する発表が多いなと感じました。心理的プレッシャーの影響という現象を紐解こうとする他の先生方に対して、勝手に仲間意識を抱きつつも、自分ももっと研究を進めていかなければと危機感を強めた機会でもありました。

さらに、2日目のポスター発表や両日の口頭発表、シンポジウム、キーノートレクチャーにセミナーなど、今年も数多くの先生方の発表を聞く事が出来ました。学会中、どの会場も研究に対する熱気に包まれており、活発な議論を目の当たりにしました。私は、学会で様々な分野の最新の研究結果に触れることが出来ることを毎回とても楽しみにしています。普段は運動制御や運動学習をメインとして研究を進めていますが、スポーツの現場に関わる際には動機づけやメンタルトレーニング等、多様なスポーツ心理学の知識が必要となります。学会では、自分が日頃追い切れていない分野の最新の研究結果に触れることができ、また先生方とお話をさせていただくことで、非常に幅広くまた楽しく知見を得ることが出来ると感じています。また研究に真摯に励まれている多くの先生方、特に同年代の先生方を眼の前にして、自身の至らなさを受け止めると共に、より一層の努力を誓う場ともなりました。

最後になりましたが、お世話になりました国士舘大学の先生方、会期中を通し様々な場面でディスカッションをさせて頂いた先生方、そしてこのような演者報告を通して振り返りの機会を与えて頂いた先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

演者報告

池田理紗（山梨大学大学院）

この度、8月25～27日にかけて国士舘大学で開催された、日本体育学会第66回大会心理学分野でのポスター発表についての報告を執筆する機会を頂き、誠にありがとうございます。私は今回初めて体育学会に参加し、たくさんの方々の意見や考え方に刺激を受けるとともに、たくさん学びを得ることができました。

今回、私は「高校男子サッカー部における組織の運営形態が所属部員のライフスキル獲得状況」というタイトルで発表しました。本研究は、高校男子サッカー部において、指導者が選手に対して積極的に介入しながら指導を行う「上意下達」の指導、選手が主体となってチームを運営する「下意上達」のチームにおいて、選手のライフスキル獲得状況にどのような影響を及ぼすかを比較、検討したものでした。その結果、「上意下達」の指導において選手は、他者との振る舞い方といった個人が集団で機能するスキルに長ける可能性が示唆されました。また、「下意上達」のチームでは、指導者と個々の選手また個々の選手同士の間で、1対1の対人的な信頼関係を強める可能性が示唆されました。

本研究に対して、発表当日は、多くの方がポスターを見に来てくださり、様々な領域の先生方や学生の皆さんからご指導、ご意見を頂きました。先生方からは的確なご指摘を頂き、本研究の今後の課題を明確にしていく上でとても貴重なご意見を頂きました。また、学生の皆さんからは、自分自身の経験をもとに、現場を知っているからこそのご意見を頂き、今後本研究を現場で活かしていく上で重要なポイントを抑えることができました。このような貴重なご指導、ご意見を頂きましたことに、この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

本研究は、横断的データであるため直接的な因果関係は明らかではありません。今後、組織運営の形態とライフスキル獲得機能との関係をより詳細に検

討していくために、組織のネットワークとライフスキル獲得状況について縦断研究を行っていく必要があります。その際に、今回たくさんの方々から頂いたご意見をしっかりと活かし取り組んでいきたいと思っています。

今回、このようにたくさんの方々のお力を借り、本研究をよりよいものへとしていくための後押しをして頂いたと感じております。研究室、大学、領域の垣根を越えて研究に取り組むことができる環境があることにとても感謝しています。今回得た知識、考え方をさらに探求・研鑽し、また来年より良い成果を出してこの場に戻って来たいと思います。さらに、次回体育学会に参加する際には、今回初参加の私に対してたくさんの方々が手を差し伸べてくれたように、私自身も手を差し伸べられるようにになりたいと思います。そのために、知識の幅を広げたり、研究に対する理解を深めたりと、日々精進していきます。

今回の体育学会を通して、研究は一人ではなくたくさんの方々のお力添えによってよりよいものになっていくということを改めて感じることができました。今後もできるだけ多くの人との関わりの中で、ご指導を頂きながらまっすぐに誠実に研究に励んでいきたいと思っています。

最後に、改めて本大会の関係者の皆様へこの場をお借りいたしまして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

大会参加記

藤本太陽（日本体育大学大学院）

平成27年8月下旬に国土舘大学世田谷キャンパスで開催された日本体育学会第66回大会に参加しましたので、その概要と感想を報告します。

まず、国土舘大学世田谷キャンパスに関してですが、私自身世田谷キャンパスに訪問することは初めての機会だったので、今回の学会参加は大変楽しみにしておりました。世田谷キャンパスは小田急線「梅ヶ丘駅」から徒歩10分ほど、世田谷線「松陰神社駅」から徒歩5分ほどの世田谷の閑静な住宅街に隣接した場所にあります。大学は広い敷地内に近代的な施設がいくつも並び、学生が学ぶ場としては素晴らしい環境であると感じるとともに、学会参加という形で訪れることができたことは大変光栄に思っております。

日本体育学会は第63回大会から参加させて頂き、今回で4回目の参加となります。毎回様々な企画が準備され、専門領域は勿論、他領域の研究発表やシンポジウムを拝聴することができるため、多くの学びを得られる貴重な学会であると感じております。

さて、本大会のテーマは「2020東京オリンピック・パラリンピックと体育・スポーツ科学研究」ということで、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組みに関わる興味深い企画が数多く準備され、多くの知識を得ることができました。中でも体育心理学領域の「ジュニアトップアスリート育成に果たす体育・スポーツ科学研究の役割」は私にとって非常に大きな学びとなりました。演者は勝田隆先生（日本スポーツ振興センター）、杉田正明先生（三重大学）、田中ウルヴェ京先生（慶応義塾大学大学院）でした。勝田先生は国際的視点からみた日本の体育・スポーツ科学研究についての発表でした。その発表の中で、「我々は未来からスポーツを託されている」こと、また2020年の東京オリンピック・パラリンピックが行われることに対し「歴史的立場に立っている」という強い意識、危機感を

持ってスポーツにコミットしていくことが必要であるとおっしゃられており、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けての強い想いが感じられました。杉田先生はジュニア・ユース年代のトップアスリートに関する調査結果についての発表でした。内容としては、ジュニアアスリートの夏季・冬季スポーツの特徴、ジュニアアスリートが抱える問題や課題、今後のサポートの展望についてでした。現在ジュニアアスリートを対象に心理サポートを行っている私にとって大変勉強になる発表でした。田中先生はトップアスリート育成に関わる体育・スポーツ心理学研究者の役割についての発表でした。内容としては、オリンピックメダリスト、スポーツメンタルトレーニング上級指導士としての立場から、現場のトップアスリートやコーチが望む心理サポートの紹介、トップアスリートが引退後に直面する心理的課題などについてでした。普段なかなか聞く機会がないトップアスリートの心理的状況を分かり易く説明して頂き、大変貴重な発表でした。各先生方の発表はどれも興味深く、多くの学びを得ることができました。また、私自身何ができるのか？ということについて考えさせられるととても有意義な時間でした。

最後に、本大会の準備、運営をしてくださった国土舘大学の教職員、学生の皆さんの対応はとても行き届いたものであり、笑顔が印象的で気持ちよく3日間の大会期間を過ごすことができました。この場をお借りして御礼申し上げます。

司会報告

杉山佳生（九州大学）

「そうだ、ドイツにしよう。」

そんな、どこかのCMキャッチコピーのようなフレーズが頭に浮かんだのは、例年、日本体育学会大会期間の前日に行っていた「プレセミナー」を、諸般の事情で大会期間中に「特別セミナー」として実施することに決めた、平成27年2月頃のことだった。大会最終日の夕方、他の専門領域のほとんどのプログラムが終了した後の開催ということで、いかにして多くの方々の関心を引こうかと案を練っていたが、最後は私の個人的な好みに拠ることとし、ドイツの体育・スポーツ心理学を取り上げることにした。テーマがドイツということになれば、演者は、この人しかいない、余人をもって代えがたいということで、慶應義塾大学の近藤明彦先生にお声かけをし、快諾を得て、今回の特別セミナーの開催に至った。

先ほど、個人的な好みに拠ったと書いたが、ドイツについては、大学院に入って体育・スポーツ心理学を本格的に学び始める前から、一般に「真面目」といわれるその気質や、サッカー場面でしばしば用いられていた「ゲルマン魂」という言葉などを通して、高い関心を持っていた。大学では、第二外国語としてドイツ語を選択し、大学院の入学試験にはドイツ語の試験があり、大学院の演習授業ではドイツ語の文献を読み、大学院在学中には、ドイツのスポーツ心理学者（Dieter Teipel先生）が外国人教員として赴任したりしていて、ドイツとの繋がり方は多様であった。このような「ドイツ語」「ドイツ人」「ドイツ学問」との関わりの中で、それまで全く接点のなかった近藤先生と出会うことになり、私の中では、「ドイツのことなら近藤先生」という図式ができ上がっていった（もちろん、私の大学院の指導教官であった市村操一先生の影響も多大であったが、ここでは、割愛させていただく）。そんな訳で、今回のセミナーを最も楽しみにしていたのは、

実は（企画者としては、あまり大きな声では言えないが）、私だったかもしれない。

講演は、「ドイツスポーツ心理学の特徴」というタイトルで行われたが、心理学研究の特徴や動向だけでなく、ドイツの学校教育システムや大学教員人事システムなど、幅広く、話題をご提供いただいた。詳細は、近藤先生ご本人のセミナー報告に譲るとして、特に私の印象に残ったのは、小学4年生で将来の方向性を決めなければいけないということと、大学では、履修した科目の試験に2度不合格となると、退学になるということであった（ただし、学生は、けっこう冷めた感じで、その現実を受け止めている、とのことであった）。このような教育システムが（もちろん、紹介された事項に限ったものではないが）、ドイツ人の物の考え方やドイツ流学問の背景にあるというのが、近藤先生の主張であった（と私は解釈をした）が、なるほどと思わせるところがあった。

セミナーには、ケルン体育大学を卒業したという日本人の方（近藤先生には20年ぶりくらいにお会いした、とおっしゃっていた）も含めて、80名近くの方々にご参加いただき、予想以上の盛況となった。参加いただいた皆様には、この場を借りて、あらためて、感謝申し上げたいと存じます。

演者報告「ドイツスポーツ心理学の特徴」

近藤明彦（慶応義塾大学）

アメリカにおけるスポーツ科学の時代のニーズに合わせた先進的な取り組みに比べ、ヨーロッパのスポーツ科学は少々保守的であるとか理論中心であるとかのイメージをいただくことが多いと思われる。

今回の体育心理学分科会の特別講演では1991年から93年までの2年間ドイツ・スポーツ・ホッホシューレ・ケルンに在外研究員として滞在したのをきっかけに、ドイツスポーツ心理学会（Arbeitsgemeinschaft fuer Sportpsychologie in Deutschland : ASP）、ヨーロッパスポーツ心理学会（FEPSAC）への参加や、日独スポーツ科学会議を主催した経験から、ドイツスポーツ心理学の特徴について話題提供を行った。

講演内容としては、筆者がドイツに滞在中に感じた教育制度が日米と異なり、このことが様々な価値観の違いにつながるのでは無いかという観点から、まずドイツの教育システムについて話題を提供した。近年EC（欧州共同体）として参加国が様々なシステムを共通に仕様とする試みもあり、教育面ではボローニャ・プロセスと呼ばれる、高等教育における学位認定の質と水準を国が違っても同レベルのものとして扱うことができるように整備するのを目的とした合意により、アメリカと同じようにバチェラー、マスターという学位が取れるようになってきた。しかしながら旧来の学士号（Diploma）、そして博士号（Doctor）という教育システムを長く取っていたことなどが研究の質や動向に深く影響を与えているのでは無いかと考えている。

話題としては、ドイツの大学の入学システム、学位のシステムについて（UniversitaetとHochschule、DiplomとDoctor-Arbeit）、そしてドイツの教員人事のシステムについて（ProfessorとDozent：私講師、Angeschuetelter）等を概説してドイツの学生ならびに研究者が置かれている状況を説明した。

さらに、筆者が滞在したケルン体育大学の事例を挙げ、ドイツの研究システムについて状況を説明した。ケルン体育大学では三人の教授が在籍しており、それぞれの教授の持つ研究プロジェクトのテーマに関連した研究を助教授や私講師が展開しており、特にヘッドの教授たちは研究テーマの理論的基盤を提唱するという展開であることが印象に残っている事について説明した。中でもニツェ教授の“ハンドリング・セオリー”を中心としたプロジェクトは歴史的に見ればゲシュタルト心理学の考え方を引き継いでおり大変興味深い内容であった。また、ドイツにおける論文の執筆において最も重要視されるのは研究テーマの選定に至るまでのその分野の学問的背景を明示する事に注力を注ぐことで有り、博士論文などでは多い場合は1/3が研究背景という場合もある。

さらに旧知のドイツのスポーツ心理学者であるユウルク・ミュンツェルト教授（ギーゼン大学）、ローランド・ザイラー教授（ベルン大学）やディーター・タイペル教授（イエナ大学）やドイツスポーツ心理学会（APS）機関誌の情報から現在ドイツで行われている研究分野やそのテーマについて情報提供を行った。テーマとしてはスポーツと暴力の関係、コーチと選手の関係：スポーツにおける社会相互作用について、チームス・スポーツ選手のキャリア進行の特異性、ハンディキャップ（感覚障害）を持つ者への運動学習プログラムの検討、等であり、研究分野の展開の幅は筆者がドイツに滞在していた頃に比べても幅広くなっていると感じられた。

以上の内容について概説した後、幾つかに質疑に応じた。

傍聴記

星川麻里子（大阪体育大学）

第66回日本体育学会において、体育心理領域での最後のプログラムは近藤明彦先生の「ドイツスポーツ心理学の特徴」についての特別セミナーでした。近藤先生はケルン体育大学への派遣留学を経て、日独スポーツ科学会議等の運営を担当するなど、ドイツの研究者の方々と20年以上の交流経験をお持ちでいらっしゃるといったご紹介がありました。私自身、海外のスポーツ心理学の話をあまり聞く機会がなかったので、非常に楽しみに聞かせていただきました。

はじめに、ドイツの大学の入学システム、学位のシステムについてのお話がありました。小学1～4年までの基礎学校で学んだ後、「進学コース」、「職人訓練学校（工業）」、「職人訓練学校（手工業）」の3つのコースに分かれて学んでいくという流れで、就学4年目で将来の職業選択が求められるということがとても印象に残っています。それに関連し、大学入学については学生自身が勉強していきたいことを進路選択に反映させるために、大学の先生の専門性をみて大学を選ぶ方式は、学生が自身のキャリアについて考える力を必然的に養っていける機会なのではないかと感じました。また、ドイツでは公立大学だと学費は基本的にかからないことや、電車の定期がもらえること、さらにオペラや芸術鑑賞の学割があるためにみんなが学生でいたいと思っており、それが学習に対するモチベーションになっていると考えられます。

しかし、美味しい側面だけではなく卒業に関してはとても難しいシステムになっています。一度履修した科目には必ず合格する必要があることや、国家試験に合格しなければならないといった厳しい側面を達成することは容易なことではないと考えられます。このことから、ドイツの教育システムは、学生の学習に対するモチベーションや金銭的な支援、生活の充実度を保つための支援も確立されているよう

に感じました。

続いて、ドイツの教員人事のシステムについてお話がありました。まず、大学の教授になるために必要な「大学教授資格」というものを獲得する必要があります。そのためには修士課程かディプローム課程を経て、博士課程を修了し、ドクター論文よりもレベルの高い論文を書き上げることで「大学教授資格」を獲得できるそうです。日本では大学の裁量で行われるところを、ドイツは資格を取得してから初めて大学の教授になれるという制度を取っており、質の高い大学教授の育成が可能になっていると感じました。

後半では研究プロジェクトの展開の事例について、ケルン体育大学のHandlungstheorieを例にしたお話や、近年の研究動向についてのお話がありました。選手にフィードバック（以下FB）を与える際はまず70%だけFBし、残りの30%は選手自身に考えてもらい、その後100%FBをするという段階踏むと、パフォーマンスが向上したという事例や、プロ選手の暗黙的な動機、山登りのフロー体験、子どもの発達研究など、非常に興味深いものばかりでした。

今回の特別セミナーを通じて、文化の違いや研究思考の実際の事例なども知ることができました。海外の論文を読むことは私自身なかなか手をつけられずにいましたが、海外の論文を積極的に読み、柔軟に取り入れていくことができれば今後自分自身の研究活動も上手く進めていけるかもしれないと感じることができました。研究の方向性を見直すきっかけを与えてくださった近藤先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

Ⅱ．研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会 活動報告

杉山佳生（九州大学）

本研究会世話人の杉山が、日本体育学会体育心理学専門領域企画委員長として、本研究会メンバーの近藤明彦先生（慶應義塾大学）に特別セミナーの講師を依頼したということもあって、平成27年度の例会は、そのセミナー終了後に、夕食を兼ねて開催しようということになりました。当初、参加を希望していたメンバーは10名ほどいたのですが、学会最終日の夜ということで、旧知との約束ができたという先生方が何名かおられ、結果的には、共同会長のお二人（阿江美恵子先生、伊藤豊彦先生）、近藤先生、安部久貴先生（北海道教育大学）、特別セミナーに参加され、近藤先生には数十年ぶりに再会したという川瀬周平さん（（公財）千葉県体育協会）、そして、私という少人数となり、大会会場近くの、こじんまりとしたお店での開催となりました（私たちがお店に入った後、数名の常連さんらしき方々がお店に来たのですが、いつもと違って「満席近く」になっているということで、お帰りにになりました。常連さん、すみませんでした）。

例会では、主に、近藤先生が特別セミナーでお話をされたドイツの体育・スポーツ心理学事情を肴に、更なる情報交換や意見交換をしました。また、「ドイツの大学を卒業することは大変難しい」というお話が特別セミナーでは出ていましたが、今回の例会にスポット参加された川瀬さん（その後、ご入会いただきました）がケルン体育大学の卒業生だということで、そのときの経験談等も、お聞かせいただきました。さらに、かつて（筆者が大学院に在籍していた頃）は、ドイツ語で書かれた文献を読んでドイツのスポーツ心理学研究を学んでいたという「昔」話や、サッカーに携わる参加者が何名かいたということから、ドイツサッカー（研究や指導）の話題でも、盛り上がりました。今回の例会をきっかけに、ドイツのスポーツ心理学を改めて見直そうという動機づけが、少なくとも筆者の中では、高まりました。

平成27年度の活動として報告できることはこのく

らいであり、与えられた紙面が余りましたので、ここで、改めて、「スポーツ社会心理学研究会」の紹介をさせていただきます。

本研究会は、非常に「ゆるい」結びつきの会です。基本的には、メーリングリストに登録することで入会となり、「忘れた頃」に情報交換をし、また「忘れた頃」に、例会を行っています（一応、年一度の例会開催を目指してはいるのですが・・・）。

本研究会が対象とするテーマは、一言でいうならば、「miscellaneous」ということになります（個人的には、「落穂拾いの」と表現しています）。というのも、「社会心理学」を、「対人・集団等にかかる心理学」だけでなく、「社会に貢献する心理学」も含むものとして捉えており、その意味で、あらゆる「スポーツ心理学」が対象になりうると考えているからです。実際、「体育の心理学」も本研究会の対象であり、「体育教師のための心理学」という翻訳書を出していますし、他の研究会のメンバーを兼ねている方も、多数いるような状態となっています。

このようなまとまりのない中でも、体育・スポーツ心理学の中の忘れられがちな領域の活性化や、異分野・異領域の出会い・融合等を目指して、研究会活動を行っていきたいと考えていますので、是非、ご入会（メーリングリストへの登録）をご検討いただければと存じます。会員として、メールで積極的に情報発信をしていただいてもけっこうですし、いろいろな企画をご提案いただいてもけっこうですし、「ユウレイ会員」でもけっこうです（自由な参加スタイルが、本研究会の特徴でもあります）。ご関心がありましたら、下記までご連絡をいただければ、幸いです。

スポーツ社会心理学研究会事務局

杉山佳生（九州大学大学院人間環境学研究院）

sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会（ISMTE）と国際応用スポーツ心理学会（AASP）をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。

本研究会は、現場の指導者や選手を対象に、スポーツメンタルトレーニング指導士が情報の提供をし、選手や指導者が現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2015年度は、東海大学研究会が毎週1回の開催をし、5月に関東地区、愛知県、栃木県の各研究会が毎月1回、中京地区が年3回の講習会を開催をした。北海道支部会では、12月に帯広地区で2日間講習会を開催、札幌地区では1月に1日半講習会を2回で3日間講習会を実施した。残念ながら、沖縄、福井、秋田、長崎研究会が休止中となっている。

情報収集活動としては、研究会のメンバーがインディアナポリスで開催された国際応用スポーツ心理学会（AASP）に8名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。

さらに、本研究会の代表（高妻）が4月から9月まで、米国留学をし、帰国後に東海大学・関東支部研究会にて、米国におけるメンタルトレーニングの現状について報告をした。たとえば、IMGアカデミーというプロ選手育成学校での1か月にわたる研修の報告があった。そこには、テニス・野球・バスケットボール・ラクロス・アメリカンフットボール・ゴルフ・サッカーなどで大学への奨学金入学やプロを目指す小学・中学・高校生が世界80か国から800名来ており、10名のメンタルコンディショニングコーチが心理的サポートをしていた。そこでは、毎週1回のメンタルトレーニングのセッションやビジョントレーニング、また他にも栄養学・フィジカルコンディショニング・リーダーシップ・大学への準備、そして毎日3時間の間週20時間の練習が組み込まれていた。ここでは、毎日各種目5時間のメンタルコンディショニングのセッションに参加し、そこで実施されている内容の報告をした。

また、コロラドスプリングスにあるオリンピック

トレーニングセンターも訪問をし、専属のスポーツ心理学者であるショーン・マッカーム博士やピーター・ハベル博士との情報交換やオリンピック選手のメンタルトレーニングセッションにも特別参加をしてその内容を報告した。特に、マッカーム博士のセッションでは、我々が現場でサポートしている内容とほぼ同じメンタル面強化の指導がなされていた。またハベル博士のセッションでは、座禅を組み、その中でマインドフルネスの説明と歩く禅の実践が行われていた。ただ、日本の禅寺に行き座禅を組むだけと違う点は、スポーツ心理学という観点からの説明やその理論的背景を理解したうえでの座禅をしていたことが報告された。

さらに、ボストンレッドソックスとタンパベイレイズというメジャーリーグ（プロ野球）チームでの研修では、日本人広報や日本人トレーナーとの情報交換をし、両チームにもスポーツ心理学者がサポートをしていたことが報告された。

このような学会で取り上げられた内容を報告し、その情報を発展させ、現場でどう応用するかという形式で研究会は開催されている。一方、毎月開催される関東地区や毎週開催の東海大学研究会では、自己紹介を兼ねた情報交換が30分程度行われる。参加者が現場での問題点やメンタルトレーニングの実践例やその効果等を持ち寄り報告やそのディスカッションをしている。また主催者側からの話題提供が行われ、同時にいくつかの心理的スキルや実践例に対してディスカッションが行われている。さらに、スポーツメンタルトレーニング上級指導士の資格取得者からの話題提供や現場での実践例が報告されている。加えて、参加者の選手やコーチからの報告や話題提供、映像による試合や練習場面での報告からグループを作りディスカッションなどが盛んに行われている。研究会後は、懇親会等で参加者同士によるさらなる情報交換が毎回行われている。

本研究会は、現場のコーチや選手の参加が多いため現場での実践、競技力向上を目的とした情報交換（研究と現場・実践のキャッチボール）が盛んに行われている。

運動学習研究会 活動報告

工藤和俊（東京大学）

今回で第24回目となる運動学習研究会は、2016年3月4日に東京大学駒場キャンパスにて開催されました。例年、本研究会は泊りがけで実施していますが、本年は3月3日に同所で開催された国際シンポジウム“Integrated Understanding for Emergent Property of Cooperation and Competition Dynamics”に日程を合わせての1日開催となりました。発表は以下の8題であり、今年も時間に縛られない議論が交わされました。

氏名 所属

発表題目

筒井和詩 東大大学院

1対1突破課題における勝敗の決定要因

向井香瑛 愛知教育大大学院

共同動作における調整ストラテジー

山本耕太 東大大学院

ジャグリング課題における適応過程

太田啓示 東大大学院

ばらつきが見えると運動は変わるか？

藤井慶輔 学振・名古屋大

二者間から二集団間攻防へ拡張する理論モデルの構築

倉松由子 東北大

視覚の制約と片麻痺者の力制御の変化

山本裕二 名古屋大

スポーツ集団の社会的ネットワーク

荒木雅信 大阪体育大

競技中の2選手間の相互因果関係の検討

ら（例えば、“Triplet, N., 1898, American Journal of Psychology”論文など）発展というより、むしろ「回帰」といえるのかもしれませんが。

本研究会の特徴の一つは、学会のようにわずかの時間のみで議論するのではなく、存分に議論を尽くすことが挙げられます。疑問や質問を徹底的にぶつけ、それに応答することで議論を深めます。議論は発表時間のみならず、ときに場所を変えて深夜にまで及ぶこともあります。

もう一つの特徴に、報告集の発行があります。参加者は単に発表を聞くのではなく、必ずいずれかの発表に文書でコメントし、発表者は発表内容をまとめるとともにコメントへの返答を行います。議論はその場で終わらせることなく、文章にまとめることで、今後の研究発展の指針を得ることができます。発表へのコメントは、ときに実践的見地からのものであったり、ときに論文の査読者のような立場からのものであったり、ときに共感や励ましであったりします。このような、多様なフィードバックを得ることができるという点が、本研究会の魅力の1つといえます。

今年度の研究会は、9月に大阪体育大にて開催予定です。日程の詳細については、下記ホームページをご参照ください。学習に興味をもつ多くの方々の参加をお待ちしております。

運動学習研究会ホームページ

<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/>

近年の発表テーマを見ますと、個人レベルのスキル獲得から、対人間の協調・駆け引きや、集団のダイナミクスまで研究対象の広がりを見せています。ただし、対人や集団のダイナミクスは、社会心理学領域において最も古い研究テーマともいえることがか

臨床スポーツ心理学研究会 活動報告

中込四郎（筑波大学）

本研究会は、一昨年より、会の名称に「学」を加え、「臨床スポーツ心理学研究会」と改め、55名の会員登録によりスタートしました。平成27年度は、第1回に引き続き岐阜大学サテライトキャンパスを会場に一泊二日の日程で行われました（平27.10/11～12）。当日の参加者は36名でした。

研修内容は、平木貴子先生（日本大学）より「セカンドキャリアへの取り組みを行いながら競技を続けた選手の事例」、そして竹内早耶香先生（びわこ学院大学）より「心身統一的手法をベースにしたメンタルトレーニング—高校生球技種目チームを対象として—」の2事例が報告されました。各事例では、鈴木 壯先生（岐阜大学）そして中込が指定討論者を担当し、参加者とともに事例の理解を深めていきました。さらに、中込（筑波大学）からは「アスリートの心理サポートにおける私の変遷—心理スキル、内界探索そしてカウンセリングアプローチへ—」とのタイトルでレクチャーが行われました。研究会のリニューアルを期に、会員間での情報交流の活発化を目的とした下記のようなヘッダを用いたニュースレターを、年2～3回のペースで発刊するようになりました。



第2回の研究会の紹介には、上述のニュースレター一創刊号に寄せられた秋葉茂季先生（国士舘大学）の傍聴記を以下に再掲させていただきました。

『＜略＞ 平木先生の事例報告では、相談者の強迫的傾向やコントロール欲求の高さ、さらには競技中に身体をどのように体験しているかなど様々な観点から検討がされた。最後に平木先生自身が振り返られた、カウンセラー自身の課題と相談者が抱える

課題が類似しているという点については、フロアの中でも共感できる参加者が多かったのではないかとと思う。自身の事例を報告することは勇気がいることである。平木先生の報告は、トップアスリートの貴重な相談事例を報告していただいただけではなく、事例検討会のあるべき姿を示してくれたという点においてもここから感謝したい。

竹内先生の事例報告では、はじめに心身統一的手法の概要についての説明があり、その後、高校生チームを対象とした実践例を提示いただいた。東洋文化的な考えをアスリートが取り組みやすいようにメンタルトレーニングに落とし込んでいるという点で非常に工夫されており、現場介入の新たなヒントを得た参加者が多かったのではないかとと思う。個人的には、心身統一的手法を継続することで身体に対する体験意識が変容することとマインドマップに示される内的変化を示す諸情報がどのようにつながっているのか興味が惹かれた。

中込先生によるレクチャーでは、中込先生が歩んできた心理サポート実践の歩みをみせていただいた。フロアにいる先生方も変遷の中に登場し、筆者のように今心理サポート実践の入り口に立っている立場としては非常に刺激を受けた。また、レクチャーの終盤で「カウンセリングとパフォーマンス向上の関係については、まだまだこれからみなさんと議論を深めていきたい」とおっしゃられていたことがとても印象深く、中込先生の学び続ける姿勢に感銘を受けた』（秋葉茂季：傍聴記①，臨スポ心News Letter, No. 1, p. 6）

じっくり時間（150～180分）をかけてアスリートの心理サポート事例を聴く機会は、今のところ限られており、本会の持つ意味は大きいと考えています。今後もさらに充実した研修会となるよう、会員一同、活動を継続していく所存です。

スポーツ動機づけ研究会 活動報告

伊藤豊彦（島根大学）

スポーツ動機づけ研究会では、会員の研究報告の場を提供するとともに、会員相互の情報交換を図るため、平成27年5月30・31日の2日間にわたって、第13回目の研究会が順天堂大学 本郷・お茶の水キャンパスのセンチュリータワーにおいて開催されました。主な内容は以下の通りです。

- ・サッカー選手のチーム戦術に対する認識について（防衛大学校・小坪 昭仁）
- ・日本代表チームにおけるモチベーションビデオの実践事例報告（日本パラリンピック委員会・永尾 雄一）
- ・大学アルペンスキー選手の試合における行動と心理状態について（順天堂大学大学院・沖 和砂）
- ・心理的アプローチによるスポーツスキルの修正（北星学園大学・養内 豊）
- ・日本人サッカー選手におけるアスリート・バーンアウトとアスリート・エンゲージメントの関連（順天堂大学大学院・上村 明）
- ・集合的効力感の形成過程に関する実験的検討（大阪大学・内田 遼介）
- ・体育授業づくりにおいて動機づけをどのように考えるのか（筑波大学・長谷川 悦示）
- ・関係発達論的視点からの集団スポーツにおける主体性についての考察：自分を見つけられない者との語り合い（中京大学・小林 洋平）

以上の口頭発表以外にも、愛知学院大学大学院・今井美希先生によるトークセッション「日本記録への挑戦」、大阪体育大学・今蘭由望先生によるアイスブレイク「自己調整トレーニングminiレッスン」、愛知学院大学・西田保先生によるショートレクチャー「私の動機づけ研究」などの多様なプログラムが組まれ、盛会のうちに終了しました。

会場の準備等で一方ならぬお世話をいただいた順天堂大学の川田裕次郎先生に対して、参加させていただいた25名の会員とともに改めてお礼申し上げた

いと思います。

なお、28年度の研究会は、6月4・5日、愛知学院大学で開催される予定です。当研究会では、上記のような多様な内容とともに、口頭発表についてもショート版とロング版の2つを用意するなど、できるだけ参加いただきやすい方法で行っていますので、興味をお持ちの多くの先生方のご参加を心からお待ちしております。

Ⅲ. 研究室紹介

研究室紹介 武庫川女子大学 スポーツ心理学研究室（田中美吏研究室）

田中美吏（武庫川女子大学健康・スポーツ科学部：講師）

研究室概要

武庫川女子大学に赴任し2年目を迎え、こどもに例えると産声を上げて、歩き出し、1歳を迎えたような、駆け出したばかりの研究室になります。兵庫県西宮市に在る本学は、空、陸、海を利用した交通アクセスが良い立地環境にあり、大阪駅からは30分ほどで研究室に到着します。大学の1km西には「野球の聖地」甲子園球場があり、熱狂的な阪神ファンや高校野球ファンの大歓声が浜風に乘って届いてきます。プロ野球や春夏の高校野球の観戦は、私のライフワークの一部にもなっています。

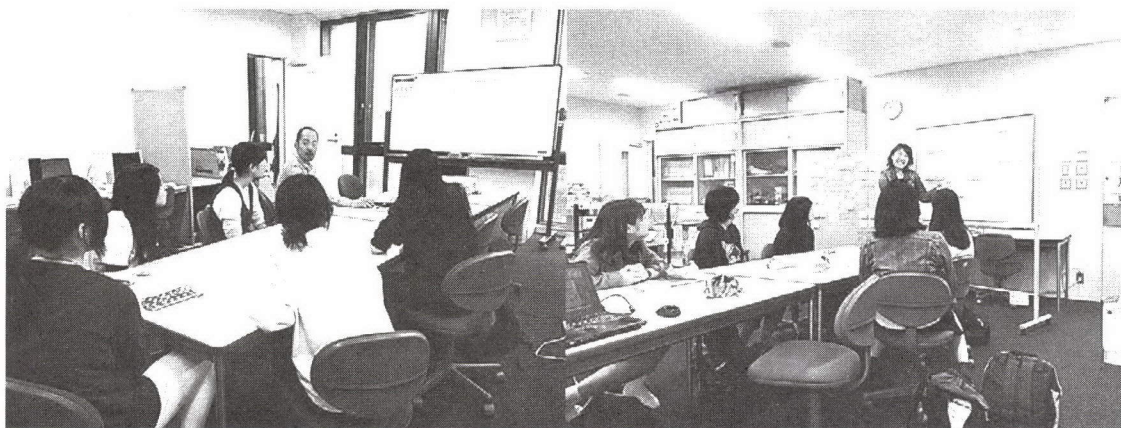
本学には、大学院健康・スポーツ科学研究科、健康・スポーツ科学部健康・スポーツ科学科、ならびには短期大学部健康・スポーツ学科を合わせて900名を超す学生が在籍し、日々の学業や研究、スポーツ活動に取り組んでいます。このような大きな組織の中での「スポーツ心理学」を看板とする一研究室になり、どのような研究室にしていこうかと試行錯誤の最中ではありますが、「スポーツスキルの制御と学習」と「スポーツメンタルトレーニング」の2つの大きな柱を軸に学びを深められることを研究室

のコンセプトとし、研究室作りをスタートしています。

学部生と大学院生

「スポーツ心理学」に関連する授業は、「スポーツ心理学Ⅰ」（学部2年次）、「スポーツ心理学実験」（学部3年次）、「スポーツ心理学Ⅱ」（学部4年次）、「スポーツ心理学特論」（大学院修士課程）を担当しています。日々の授業を通してひしひしと感じるのが、学生の「スポーツ心理学」に対する興味関心の高さです。この興味関心を落とさずに、そしてさらに意欲を掻き立てられるよう、授業のネタ作りに励んでいます。卒業論文作成に向けたゼミ活動は3年次前期から始まります。現在、4年生7名と3年生7名が所属し、今年度は本学に赴任してから初めての卒業論文作成に取り掛かっています（写真①）。私立大学のゼミとしては比較的少人数制を取っており、密な指導のもとで卒業論文の実験や調査を行っていく点も魅力に感じています。

当研究室には修士課程の大学院生も受け入れ可能ですが、まだ大学院生の在籍者がなく、いかに大学



写真① 学部4年生や3年生のゼミの様子

（左写真は4年生との卒業論文の研究計画の打ち合わせ、右写真は3年生がクラスタリングを用いてピーク・パフォーマンスを分析しプレゼンテーション）

院生を増やすかを大きな課題としています。「スポーツ心理学」を研究テーマとした修士論文を作成するとともに、日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング指導士の取得を目指す大学院生を将来的に多く輩出していくことを大きな目標としています。女子大学ではありますが、大学院は男女共学であり、他の研究室には男子大学院生も多く在籍しています。社会人入試制度もあり、仕事をしながら大学院での学業や研究に取り組む院生も複数おられます。この稿を借りまして、大学院生としての当研究室における学びの場への関心が広がることを期待いたします。

「スポーツ心理学」チーム

本学に赴任し、日々の研究室業務を運営するなかで大きな魅力に感じているのが、教員ならびに助手等の研究スタッフの充実です。他の研究室にはありませんが、本学の健康・スポーツ科学部ではカウンセリングを専門とする田嶋恭江先生、健康スポーツ心理学を専門とする松本裕史先生が長年教鞭を奮っておられ、交流を深めるとともに様々な助言をいただきながら教育・研究を行っています。さらに、スポーツ心理学の実験研究を専門とする五藤佳奈先生には、協働教員として当研究室業務にも参画いただき、多くのお力添えをいただいています。また、本学部の「スポーツ生理学実験室」「バイオメカニクス実験室」「スポーツ心理学実験室」には、実験助手も配置されており、今年度からは鷹野都先生が着任し、「スポーツ心理学実験」の授業を中心に当研究室の業務にも一躍を担っていただいています。加えて、現在募集中ではありますが、研究支援員の配置制度もあり、スポーツ心理学を専門とした多くのスタッフがチームとなり、チーム一丸となって教育・研究に取り組んでいます。

共同研究や研究ミーティング

科学研究費補助金の共同研究者、連携研究者、ならびに研究協力者制度を活用し、昨年度より他大学の先生との共同研究も行い始めています。現在のと

ころ、周辺大学では田中ゆふ先生（近畿大学経営学部教養・基礎教育部門：准教授）、少し遠方にはありますが村山孝之先生（金沢大学国際基幹教育院GS教育系：准教授）らと共同研究体制を取って互いの研究を進めています。昨年初めて共同研究者メンバーで集まり、研究ミーティングを行いました。大学院を修了して以降、学会や研究会以外で、専門的な意見を交わしながら研究を進めることの環境的難しさに直面していた自分にとって、驚くほどの有意義な時間を過ごすことができました（写真②）。今後も定期的に研究ミーティングを行う計画を立てており、共同研究者間での議論を基に、各々の実施している研究の質の向上を狙います。また、ゲスト講師を招いて講習をいただくことも企画し、推進中の研究テーマに関連した知識の研鑽を図りながら、共同研究や研究ミーティングのネットワークを拡充していきたいと考えています。

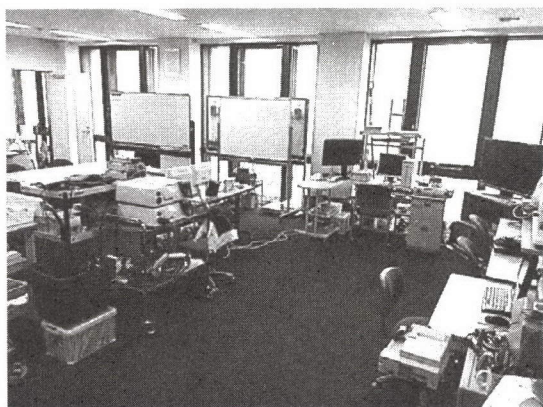


写真② 共同研究者との研究ミーティングの様子
（左より田中ゆふ先生（近畿大学）、村山孝之先生（金沢大学）、五藤佳奈先生（武庫川女子大学））

研究環境

当研究室が利用する実験室には、前任や前々任の先生から引き継いできた機材も含めまして、脳波計、アイカメラ、サーモトレーサー、重心動揺計、筋電図計、経頭蓋磁気刺激装置（TMS）、経頭蓋直流電気刺激装置（tDCS）、電気刺激用アイソレータなど、スポーツ心理学研究を行っていくうえでの種々の実

験機材を備えています。実験スペースは限られており、実験室内でダイナミックなスポーツ動作を伴う実験を行うことは難しいですが、限られたスペースに上手く実験機材を配置することで、座位や立位での様々な基礎実験を実施できるよう工夫をしています（写真③）。また、私の研究室と助手室からは部屋内の扉から実験室に出入りができ、実験やゼミ、ミーティングを行ううえで、理想的な動線を有しています。



写真③ スポーツ心理学実験室

（写真右手前が実験スペース、左奥がミーティングスペース）

おわりに

日々の教育・研究活動や時々の研究成果などの情報を発信する場として、研究室ホームページを立ち上げています。アクセス回数が増えるよう、トップページには「お知らせ」コーナーや「最近読んだ論文や本」の簡単な紹介コーナーを設けて、週1回ほどのペースで更新するようにしています。URLは以下の通りです。最後になりましたが、今後も研究やスポーツを通して、全国の多くの先生方や学生との交流の場が広がることを楽しみにしています。

研究室ホームページURL <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~tnk.lab/>

IV. 学位論文紹介

心理的プレッシャーが踏み出し運動における初期姿勢ならびに 予測的姿勢制御に及ぼす影響

佐々木丈予 (国立スポーツ科学センター)

学位：博士 (学術)、授与機関：広島大学

取得日：2015年9月9日、指導教員：関矢寛史教授

目標とする競技会での実力発揮を目指す多くのアスリートにとって、プレッシャーによる「あがり」は重要な克服課題である。この問題意識の下、これまでにプレッシャー下における運動スキル遂行の特徴を明らかにするための研究が様々な側面から行われてきた。特に近年は、プレッシャーにより生じる運動スキル遂行の変化として行動面、すなわち動きの変化が様々な運動スキルを対象として調べられており、その理解が進められてきた。しかし、先行研究では主要運動のみの変化が調べられており、主要運動に先行する予備的な姿勢制御については調べられてこなかった。プレッシャーが運動スキルのパフォーマンスに及ぼす影響の全体像を理解するためには、このような予備的な姿勢制御に生じる変化を明らかにすることも必要と考えられた。そこで、本研究では、運動スキルの遂行において重要な姿勢制御として初期姿勢と予測的姿勢制御 (APA) に着目し、これらの姿勢制御とパフォーマンスの関係性が多く研究されている1歩踏み出し運動を課題として扱った。以上より本研究では、プレッシャーが1歩踏み出し運動における初期姿勢とAPAに及ぼす影響を調べることを目的とした。そして、1歩踏み出し運動の開始の様式、踏み出しに求められる素早さや着地位置に求められる正確性といった複数の要求特性の組み合わせを踏まえ、合計5つの実験を行った (第1章)。

第2章では、プレッシャーが自己ペースにより開始される1歩踏み出し運動の初期姿勢とAPAに及ぼす影響を調べることを目的として実験1を行った。実験参加者は、自己ペースにより開始され、踏み出しの素早さと着地位置の正確性が同時に要求される1歩踏み出し運動を、プレッシャーが負荷されないノンプレッシャー条件とプレッシャーが負荷されるプレッシャー条件の2条件においてこの課題を行っ

た。プレッシャーの負荷は、低パフォーマンス時の再実験の要請や実験映像の講義での使用という偽教示および評価的な観衆 (5名) により行った。その結果、初期姿勢については、プレッシャーによる矢状面体幹角度の前傾が認められた。また、APAについては、後方平均床反力と後方最大床反力がプレッシャーにより増加した。以上の結果から、プレッシャー下では主要運動だけではなく、それに先行する予備的な姿勢制御においても変化が生じることが示された。

第3章では、1歩踏み出し運動の開始の様式によって、プレッシャー下で生じる初期姿勢とAPAの変化に違いがあるのかに着目し、実験2を行った。実験2では、音刺激に対する単純反応により開始され、踏み出しの素早さと着地位置の正確性の量が求められる1歩踏み出し運動を課題とした。結果、プレッシャーにより、自己ペースによる1歩踏み出し運動を課題とした実験1の結果と同様の変化が初期姿勢とAPAに認められた。以上の結果から、素早さと正確性の両方が要求される1歩踏み出し運動の初期姿勢とAPAにおいて、プレッシャーにより生じる変化は運動の開始の様式が自己ペースであるか単純反応であるかに関わらず同様であることが示された。

実験1と実験2の結果から、踏み出しの素早さと着地位置の正確性の両方が要求される1歩踏み出し運動において、プレッシャー下では初期姿勢における矢状面体幹角度の前傾とAPAにおいて後方に加えられる力の増加が示されることが示された。この変化は運動の開始の様式が自己ペースか単純反応かに関わらず生じたため、この変化を規定する要因としては、素早さや正確性といった課題の要求特性が考えられた。

そこで第4章では、素早さや正確性といった課題の要求特性がプレッシャー下での1歩踏み出し運動

における初期姿勢とAPAの変化をどのように規定するのかを明らかにするために、踏み出しの素早さのみが求められる課題（実験3-1）、着地位置の正確性のみが求められる課題（実験3-2）、素早さと正確性の両方が求められる課題（実験3-3）のそれぞれを対象とした計3つの実験を行った。また、より詳細に姿勢制御を記述するために、初期姿勢における身体動揺とAPAにおける下腿筋群（前脛骨筋とヒラメ筋）の共収縮率の評価を加えた。

これらの3つの実験の結果をまとめると、まず、プレッシャー下の初期姿勢における矢状面体幹角度の前傾は、素早さのみや正確性のみが求められる場合では生じず、素早さと正確性の両方が求められる場合にのみ生じることが示された。この要因としては、課題の要求特性に関わらない、課題の難易度が考えられた。加えて、初期姿勢における身体動揺については、3つの実験のすべてにおいて、プレッシャーによる減少が認められた。この変化の背景にある要因として、課題遂行に伴う認知的負荷の増加やネガティブな情動反応の喚起が考えられた。次にプレッシャー下におけるAPAの変化は、課題の要求特性に応じて変わることが示された。すなわち、踏み出しの素早さのみを要求した実験3-1ではプレッシャーにより後方平均床反力ならびに後方最大床反力の増加が生じ、逆に着地位置の正確性のみを要求した実験3-2では後方平均床反力と後方最大床反力の減少ならび下腿筋の共収縮率の増加が生じた。なお、素早さと正確性の両方を求めた実験3-3では、実験1の結果が再現された。このように、素早さや正確性といった課題の要求特性は、プレッシャー下での1歩踏み出し運動における初期姿勢の変化とは直接的な関係性は持たない一方で、APAの変化とは直接的な関係性を有することが示された。

第5章では、以上の5つの実験の結果をもとに総括論議を行った。本研究の一連の結果は、プレッシャーにより予備的な姿勢制御に変化が生じることを示し、この変化が運動スキルのパフォーマンスに影響を及ぼす可能性を示唆するものである。本研究における新たな知見として、①プレッシャー下での1

歩踏み出し運動における初期姿勢の前傾は素早さのみや正確性のみを高めるために生じるものではないこと、②素早さや正確性といった課題の要求特性に関わらず、プレッシャー下では1歩踏み出し運動の初期姿勢における身体動揺量が減少すること、③課題の要求特性に応じて、プレッシャー下で生じるAPAの変化は異なることが挙げられる。

本研究は、予備的な姿勢制御である初期姿勢とAPAのプレッシャー下における特徴を、複数の課題の要求特性を用いることで包括的に明らかにした。今後は、プレッシャー下の予備的な姿勢制御の変化がパフォーマンスに及ぼす影響を検討することが必要である。さらに、現実のプレッシャー場面を対象とした研究から得られた知見と組み合わせることにより、プレッシャーが運動スキルの遂行に及ぼす影響の解明や「あがり」のメカニズムの解明につなげることが期待される。

フラクタル構造からみた連続切替打動作の熟達

鈴木 啓央 (名古屋大学)

学位：博士 (心理学) 授与機関：名古屋大学

取得日：2016年 3月25日 指導教員：山本裕二教授

本論文の目的は、連続切替打動作に現れるフラクタル構造に対して環境の時間圧および行為者の技能レベルが及ぼす影響を明らかにすることにより、連続切替打動作の熟達化に関する示唆を得ることであった。連続切替打動作とは、多様に飛来するボールに応じて複数の打動作を連続的に切り替える打動作であり、本論文では、卓球において、ある一定の投射間隔に設定された投射マシンよりフォアサイドおよびバックサイドに投射されるボールに応じて、異なる動作パターン（フォアハンドおよびバックハンド）を連続的に切り替えながら遂行する打動作を研究対象とした。この打動作の分析にあたり、複数入力 of 連続的な切替を考慮したダイナミカルシステムを扱う切替ダイナミクスモデル (Gohara & Okuyama, 1999) を援用した。先行研究において、切替ダイナミクスモデルをテニスの連続切替打動作に援用することにより、一見複雑にみえる打動作のゆらぎが、実は入力の系列に応じて規則的にゆらいでいる、すなわち、連続切替打動作に自己相似なフラクタル構造が現れることが明らかになっている (Yamamoto & Gohara, 2000)。さらに、行為者の技能レベルと環境の時間圧が、フラクタル構造に影響を及ぼすことをモデルは示唆している。そこで本論文では、技能レベルの異なる熟達者と初心者を対象に、環境の時間圧に応じたフラクタル構造の変化をフラクタル次元によって定量的に検討した。

本論文の構成は、6章からなる。第1章では、打動作における熟達研究を概観し、連続切替打動作を検討する意義および切替ダイナミクスモデルについて概説した。第2章では、本論文における目的を以下のように整理した。

1. 連続切替打動作から得られる少数実データに対するフラクタル次元解析手法を新たに開発する。
2. ある特定の時間圧下におけるフラクタル構造をフラクタル次元によって定量化し、技能レベルが異なる行為者について次元値を比較検討することにより、打動作に生じるゆらぎの規

則性によって連続切替打動作の熟達差が定量的に評価できることを明らかにする。

3. 技能レベルが異なる行為者について、環境の時間圧に応じたフラクタル構造の変化を比較検討することにより、連続切替打動作における環境の時間圧と行為者の技能レベルの関係を明らかにする。

第3章、第4章、第5章は、上記の3つの目的とそれぞれ対応している。第6章では、本論文の要約と、研究結果から得られた示唆および今後の課題について言及した。以下に、第3章、第4章、第5章において検討した具体的な内容と、研究結果から得られた示唆について記す。

第3章では、少数実データに対してフラクタル次元を正確に推定できる新たな解析手法を検討した。これまで、実データのフラクタル次元解析には、フラクタル次元の1つの尺度である相関次元を相関積分のスケーリング領域から推定するGrassberger-Procaccia (GP) 法 (Grassberger & Procaccia, 1983) が多く適用されてきた。しかし、そのスケーリング領域を定量的に決定する解析手法として提案されているMost Probable Dimension Value (MPDV) 法 (Corana et al., 2004) は、少数実データへの適用可能性に関しては未知であった。そこで本章では、傾斜差分法という新たな解析手法を開発し、少数実データに対してこれら2つの方法を適用し、比較検討した。その結果、MPDV法では相関次元が一意に定まらなかった一方、傾斜差分法では次元値を一意に推定することができた。以上のことから、少数実データに対するフラクタル次元解析では、本章で新たに開発した傾斜差分法を用いるのが妥当であることが明らかになった。

第4章では、ボール投射間隔を770msに設定した卓球の連続切替打動作を研究対象とし、この打動作に現れるフラクタル構造を相関次元によって定量化した。そして、この次元値を技能レベルが異なる行為者について比較検討した。技能レベルは、卓球の経験年数により区別し、熟達者群と初心者群の2群

を設けた。その結果、初心者群は熟達者群よりも高い次元値を示したことから、初心者の打動作に現れるフラクタル構造は、熟達者と比較してより不規則な構造に近似していることが明らかになった。さらに、両群の動作を詳察した結果、初心者では、フォアサイドにボールが飛来したにも関わらずバックハンドで打球する動作といった入力に対応しない動作が多く含まれていた。他方、熟達者では、入力に対応しない動作は非常に少なく、入力系列に応じて打動作がゆらいでいたことが示唆された。以上のことから、打動作に生じるゆらぎの規則性における熟達差は、入出力の対応関係の差異から産み出され、これが技能レベルによるフラクタル構造の相違として現れたと考えられる。したがって、連続切替打動作に現れるフラクタル構造をフラクタル次元によって定量化することにより、この打動作の熟達差が、打動作に生じるゆらぎの規則性によって定量的に評価できることが明らかになった。

第5章では、第4章の結果を踏まえ、熟達者群と初心者群について、環境の時間圧に応じたフラクタル構造の変化を比較検討した。6種のボール投射間隔を設け、各投射間隔における両群の打動作に現れるフラクタル構造を相関次元によって定量化した。その結果、両群とも、投射間隔の短縮に従って相関次元は増加し、ある投射間隔で次元値が上限に達した。さらに、各投射間隔における両群の動作を詳察した結果、上限に達する投射間隔では、初心者と熟達者ともに入力系列に対応しない動作を多く遂行していたことが示唆された。加えて、上限に達する投射間隔よりも長い投射間隔では、初心者と熟達者ともに打動作が入力系列に応じて規則的にゆらいでいたことが示唆された。したがって、技能レベルに関わらず、環境の時間圧が高くなるにつれ、打動作に生じるゆらぎの規則性は不規則な構造に変化することが示された。ただし、次元値が上限に達する投射間隔は、初心者よりも熟達者の方が短かったことから、技能レベルが高いほど、そのゆらぎの規則性を維持できる時間圧の上限が高いことも示された。以上のことから、連続切替打動作における環境の時間圧と行為者の技能レベルの関係には、技能レベルに関わらず、規則的なゆらぎを維持できる時間圧の限界が存在するが、より熟達した行為者ほどその時間

圧の限界が高いという関係が存在することが明らかになった。

これらの研究結果から、連続切替打動作では、いかなる技能レベルであっても時間の壁とも呼べるものがあり、熟達していくためには、行為者それぞれがこの壁を乗り越えていくことが必要であると考えられる。したがって、自身の技能レベルにより決定される時間の壁を乗り越えていくことが、連続切替打動作の熟達化であることが示唆された。しかし、本論文では、熟達差を中心に検討したのみであり、行為者が個々に直面する時間の壁をいかにすれば乗り越えることができるかは、今後検討する必要がある。

文献

- Corana, A., Bortolan, G., & Casaleggio, A. (2004). Most probable dimension value and most flat interval methods for automatic estimation dimension from time series. *Chaos, Solitons and Fractals*, 20, 779-790.
- Gohara, K. & Okuyama, A. (1999). Dynamical systems excited by temporal inputs: fractal transition between excited attractors. *Fractals*, 7, 205-200.
- Grassberger, P. & Procaccia, I. (1983). Measuring the strangeness of strange attractor. *Physica D*, 9, 189-208.
- Yamamoto, Y. & Gohara, K. (2000). Continuous hitting movements modeled from the perspective of dynamical systems with temporal input. *Human Movement Science*, 19, 341-371.

V. 海外情報

米国スポーツの都、インディアナポリスで行われた国際応用スポーツ心理学会（AASP: Association for Applied Sport Psychology）大会に、昨年10月13日から17日の期間で参加しました。こちらの学会は、米国で学生時代を過ごした私にはとても思い入れの深い学会です（大学院生になったの初学会大会参加は、こちらの学会大会でした！もう10年前になります）。

学会のミッションは「スポーツ心理学のフィールドでの科学、そして倫理的な実践の発展を促すこと」で学会独自のコンサルタント資格制度も持っています。大会では、スポーツ心理学を活かした実践の情報、現場に直接還元できそうな研究の発表が主になっているという、私にとっては研究だけでなく、実践に関する情報収集をする貴重な場のひとつです。今回は、大会で実践の倫理について意見交換をした経験、それから自身のシンポジウムでの研究発表について、少しご紹介したいと思います。

まずは、大会が始まる前日から1日半にわたって行われたスポーツ心理学コンサルティングの倫理講習会についてご紹介します。AASPは6つの基本的原則（General Principles）と25のスタンダード（Standards）からなる倫理のガイドラインを持っています（詳細はこちらから・・・<http://www.appliedsportpsych.org/about/ethics/>）。コンサルタント資格制度にも関連して、AASPは1990年代からこの倫理のガイドラインを発展させてきました。現在は、コンサルタントの資格を取得するには、スポーツ心理学コンサルティング、もしくは臨床心理学（カウンセリングなど）の倫理についての大学院の授業を履修し修了していることも条件のひとつになっています。

私を含め参加者は、この講習会の前にオンライン上の倫理の授業を受講していました。このオンライン上の授業の中では、AASPのガイドラインを軸にしながら、スポーツ心理学、そして臨床心理学の倫

理についての文献を読み倫理の様々な課題（コンペテンシー、守秘義務、複数の役割関係など）について学びました。この講習はオンライン上で行われていた授業をフォローアップする形で、参加者のディスカッションをベースにスポーツ心理学の実践の倫理について考えるという機会でした。

私が大学院でスポーツ心理学を学んでいたときも、もちろん頻繁に話題にのぼった倫理の課題ですが、改めてこういう風に授業を受講してみると、新しい気づきがありました。特に印象に残ったのは、ポジティブ倫理（positive ethics; Knapp & VanDeCreek, 2006）という考え方です。つい、「倫理」は「できるだけクライアントが傷つけないためのもの」と思いがちなのですが（こういう倫理はremedial ethicsと言われます；Knapp & VanDeCreek, 2006）、ポジティブ倫理は、倫理は「できるだけクライアントの可能性を引き出すためのもの」という考えを持って課題に挑んでいます。講習では、スポーツ心理学の実践には、ポジティブ倫理の考え方があっているのではないかと紹介されていました。私たちは選手を守ることも、もちろん常に考えるべきですが、もともと彼らの目標達成への応援をしたいという熱意があって、実践に関わっているのではないかと、思います。そのための倫理、という考え方も、これからしていくのもいいのではないかと感じました。まだ海外を見ても、もちろん日本でも少ないスポーツ心理学の実践倫理についての研究ですが、チーム・選手と関わり「スポーツ心理学を実践で使う」ことを目指す以上、研究を進めていく必要がある分野ではないかと思います。

さて、このように大会では実践についても考えつつ、シンポジウム内で自身の研究発表もさせて頂きました。シンポジウムは私の共同研究者でもあるDr. Todd Loughhead (University of Windsor) の企画で、タイトルは「From the front office to the playing field: Exploring leadership within sport

teams」。ジェネラルマネージャー（GM）、ヘッドコーチ（監督）、アシスタントコーチ、そして選手のリーダー、と、スポーツチーム内の様々なリーダーたちに着目した研究を紹介し、多角的にリーダーシップを検討する目的でシンポジウムは行われました。スポーツチームといっても、いろいろなポジションのリーダーがいて、いろいろなリーダーシップがあります。違う角度からリーダーを専門に研究している先生たちの発表を聞きながら、私も勉強をさせてもらいました。

私が発表させて頂いたのは「Athlete leadership in sport team: Review and future directions」で、1960年代からの選手のリーダーについての研究のシステマチックレビューの結果を少し紹介しました。これまでスポーツ心理学のリーダーシップ研究は、コーチのリーダーシップについての研究が主でした。ただ2000年代ごろから選手のリーダーシップについても研究が行われるようになっていきます。私は発表の中で、今この分野で何が明らかにされていて、何が明らかにされていないか、これから研究をどう進めるべきかについて話題提供をしました。特に日本では、まだあまり選手のリーダーシップについての研究が行われておらず、色々なことが明確になっていない状況です。それでも、コーチや選手からは、リーダーシップについての要望が多かったりします（「良いリーダーになりたい」「キャプテンをさらに良いリーダーにしてほしい」など）。少しでも現場に生きる研究をしたい、と気持ちを改めました。

また、大会で発表をする、聞く以外にも、最後のレセプションパーティーは全米大学体育協会（NCAA: National Collegiate Athletic Association）の殿堂で行われるなど、スポーツの都、インディアナポリスを堪能しました。AASP大会参加は、年に一度あるかないかの機会ですが、いつも刺激を受けて帰ってきています。このように改めて振り返る機会を頂き、ありがとうございました。

VI. 日本体育学会第67回大会関連

日本体育学会第67回大会案内

I. プレセミナー（企画委員会）

下記の要領で、体育心理学専門領域プレセミナーを開催いたします。皆様、お誘い合わせのうえ、奮ってご参加いただければと存じます。

- ・日程：2016年8月23日（火）
- ・会場：犬鳴山温泉 み奈美亭
(〒598-0023 大阪府泉佐野市大木2236、<http://www.minamitei.com/>)、他
- ・スケジュール：
 - 14：00 集合（大阪体育大学本部棟前） 会場までバスによる送迎（約15分）
 - 14：30－15：30 講演（於：み奈美亭）
テーマ：「不動心と瀧修行について学ぶ」
講師：東條仁哲 管長猊下（犬鳴山七宝瀧寺）
(修験道については <http://www.inunakisan.jp/> を参照)
 - 15：30－18：00 不動明王像ハイキング or 自由散策（いずれも、温泉を含む）
 - 18：00－20：00 情報交換会（於：み奈美亭）
 - 20：00 大阪体育大学、JR熊取駅までバスによる送迎
- ・募集定員：100名（先着順）
(企画委員会としましては、できるだけ多くの方の参加を切望しております。)
- ・申込締切：8月10日（水）予定
- ・参加費（講演・温泉・情報交換会込）：
 - 一般 6,000円
 - 学生 4,000円（一般との差額2千円は、体育心理学専門領域からの補助によるものです。)
- ・申込方法：同封してある別紙資料を参照してください。

II. 学会大会（学会大会委員会）

- ・日程：2016年8月24日（水）～26日（金）
- ・会場：大阪体育大学
- ・学会大会スケジュール：
 - 8/24 10：10－11：10 ポスター発表1
 - 11：20－12：20 ポスター発表2
 - 12：30－13：30 理事会
 - 8/25 9：00－11：00 シンポジウム
 - 11：00－12：00 総会
 - 12：15－12：45 ランチョンセミナー
 - 13：05－14：05 キーノートレクチャー1

8/26 9:00-10:20 口頭発表
 10:35-11:55 口頭発表
 13:00-14:00 キーノートレクチャー2

<シンポジウム>

テーマ:「感情から紐解く体育・スポーツ科学のこれから」

総合司会:北村勝朗(東北大学)

コーディネーター:手塚洋介(大阪体育大学)

演者:鈴木直人(同志社大学)「感情の機能ー心理・生理・行動的側面からの多角的検討ー」

演者:関矢寛史(広島大学)「感情と認知と身体運動の関係」

演者:高井秀明(日本体育大学)「アスリートの感情制御に関する実験的検証と実践的検討」

<キーノートレクチャー1>

演者:中須賀巧(兵庫教育大学)

演題:体育授業の心理学:動機づけ雰囲気に着目して

司会:内田若希(九州大学)

<キーノートレクチャー2>

演者:岡澤祥訓(大阪体育大学)

演題:運動有能感を育む指導法:体育授業からメンタルサポートまで

司会:土屋裕睦(大阪体育大学)

VII. 事務局報告

平成27年度体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日時：平成27年8月25日(火) 12:30～13:20

場所：国士舘大学 34号館 A402

出席者：阿江美恵子（会長）、関矢寛史（理事長）

土屋裕睦、北村勝朗、内田若希、工藤和俊（学会大会委員）

杉山佳生、兄井彰、西田保（企画委員）

森 司朗、荒木雅信、山本裕二（広報委員）

武田守弘、田島 誠（庶務・会計委員）

木島章文（監事）

中本浩揮（幹事）

欠席者：田村 進（監事）

挨拶（阿江会長）

<報告事項>

1. 前回理事会（平成27年度第1回理事会）議事録確認（事務局）

前回行われた理事会の議事録が確認された。

2. 会報第27号（通巻55号）について（広報委員会、庶務・会計委員会）

武田理事より、会報第27号が発刊され、会員に送付されたと報告された。住所不明によって送付不可能者が20名と多く、対応が必要であると報告された。

3. 第66回大会について（学会大会委員会）

土屋理事より、口頭発表17題、ポスター発表101題と多く、口頭からポスターへ変わるようお願いした方もいたと報告された。その他キーノートレクチャー2件、シンポジウム、特別セミナーを開催する予定であることが報告された。特別セミナーに関して杉山理事より27日の15:30から近藤先生を講師に迎えて行うことが報告された。

4. 第67回大会について（学会大会委員会）

荒木理事より、次年度大阪体育大学を開催場所として行うことが報告された。

<審議事項>

1. 平成28年度事業案（事務局）

関矢理事長より、平成27年の総会では平成28年度の事業案及び予算案を提示することになっており、それらを検討する必要があることが示された。現時点での平成28年度事業案としては、1. 日本体育学会第67回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第67回大会時のプレ/ポスト・セミナーの企画・運営、3. 体育心理学専門領域会報第28号の発行、4. 理事会（4月頃、8月頃）、5. 新旧理事会（11月頃）、6. 総会（8月頃）、7. 平成29～30年度役員選挙である。

平成28年度の事業案を考えていく上で、平成26年度より実施した年度会費の値上げを受け、事業内容の充実化を図ることが提案された。具体的には、外国人講師の招聘、プレセミナー・特別セミナーの充実、各研究会への補助（5万円程度、事前の申請が必要）、HPの充実、別冊子（読み物）の作成、若手研究者への支援（金額の補助）、若手研究者への表彰制度などについて検討した。しかし、会員からの貴重な会費を使用するには十分な検討時間が必要との考えから、有効策を再検討することとした。そこで、平成28年度の予算については、事業内容との絡みから補正予算を提示する可能性があることを了承した。

2. 平成28年度予算案（事務局）

田島理事より、平成28年度予算案が提案され承認された。しかし、上記に示した通り、平成28年度の予算については、事業内容との絡みから補正予算を提示する可能性があることを了承した。

3. 平成27年度総会議事次第（事務局）

関矢理事長より、平成27年度の総会議事次第が提案され承認された。

2015年度（平成27年度）体育心理学専門領域総会 議事録

2015年（平成27年）8月27日

会場：国土館大学 メイプルセンチュリーホール 11：40～12：20

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

III. 議長選出

秋葉茂季先生（国土館大学）が議長の指名を受け、議長を務めた。

IV. 報告事項

1. 平成27・28年度 体育心理学専門領域 理事会役員

役員の役割を下記のとおりとすることとした。今期に関しては会長推薦で事務局に3名を配置することとし（特例）、その上で関矢が理事長に選出された。なお、事務局は関矢寛史（広島大学）、田島誠（川崎医療福祉大学）、武田守弘（福山平成大学）が担当することとした。

1) 任期 平成27年4月1日－平成29年3月31日

2) 会長 阿江美恵子

3) 理事 関矢寛史（理事長）

土屋裕睦、北村勝朗、内田若希、工藤和俊（学会大会委員）

杉山佳生、兄井彰、西田保（企画委員）

森 司朗、荒木雅信、山本裕二（広報委員）

武田守弘、田島 誠（庶務・会計委員）

木島章文、田村 進（監事）

中本浩揮（幹事）

2. 平成27年度事業について

下記について事務局ならびに各委員会より報告があった。

(1) 理事会（事務局）

第1回理事会を平成27年4月5日（日）15：10～17：00に名古屋大学ES総合館1階ES会議室にて開催した。また、第2回理事会を8月25日（火）12：30～13：20に国土館大学34号館A402にて開催した。

(2) 体育心理学専門領域会報第27号を2015年7月20日付で発行した。（庶務委員・広報委員）

(3) 日本体育学会第66回大会における専門領域の活動（学会大会委員）

国土館大学にて一般発表（口頭発表17、ポスター発表101の計118）、キーノートレクチャー2つ、シンポジウム1つを開催する。また、例年のプレセミナーに代えて大会最終日に特別セミナー1つを開催する。

(4) 会員異動（庶務・会計委員）

平成27年3月の会員数：664名

平成26年3月の会員数：661名

3. 平成27・28年度の体育学研究・IJSHSの編集委員について

下記について関矢理事長より報告があった。

体育心理学専門領域から推薦した下記の先生方が編集委員として選出された。

体育学研究編集委員：兄井彰先生、木島章文先生、豊田則成先生、西田順一先生

IJSHS編集委員：荒木香織先生、國部雅大先生、山口幸生先生

4. 政策検討・諮問委員会について

下記について関矢理事長より報告があった。

日本体育学会では、平成25年度より「政策検討・諮問委員会」を新設し、日本の体育・スポーツに関わる重要な政策的・社会的課題について、学術的立場から審議検討することとなった。体育・スポーツの推進に関わる政策提言やそのための調査・研究を主な任務とするこの委員会に体育心理学専門領域からは佐々木万丈先生（日本女子体育大学）が参加し、ダイバシティ推進小委員会の委員として平成29年6月までを任期として活動を行っている。

5. 日本体育学会第67回大会

次回の学会大会について大会組織委員会委員長である荒木理事より報告があった。

日時：平成28年8月24日（水）～26日（金）

場所：大阪体育大学（熊取キャンパス）

6. 日本体育学会名誉会員について

下記について関矢理事長より報告があった。

平成27年度臨時総会において体育心理学専門領域が推薦した池田裕恵先生（東洋英和女学院大学）が平成28年4月1日付名誉会員に選ばれた。

V. 審議事項

1. 平成26年度決算（庶務・会計委員会）

平成26年度の事業報告ならびに決算報告が庶務・会計委員会よりなされ、承認された。

2. 平成27年度事業計画

平成27年度の事業計画が関矢理事長よりなされ、承認された。

（1）日本体育学会第66回大会における企画運営

（2）体育心理学専門領域会報第27号の発行

（3）第1回理事会、第2回理事会の開催

3. 平成27年度予算（庶務・会計委員会）

平成27年度の予算案が庶務・会計委員会より提示され、承認された。

4. 平成28年度事業計画（事務局）

平成28年度の事業計画が関矢理事長よりなされ、承認された。

（1）日本体育学会第67回大会における企画運営

（2）体育心理学専門領域会報第28号の発行

（3）第1回理事会、第2回理事会、第3回新旧理事会の開催

（4）平成29－30年度役員選挙

（5）その他

平成26年度より実施した年度会費の値上げを受け、事業内容の充実化を図ることが提案され承認さ

れた。具体的には、外国人講師の招聘、プレセミナー・特別セミナーの充実、各研究会への補助（５万円程度、事前の申請が必要）、ＨＰの充実、別冊子（読み物）の作成、若手研究者への支援（金額の補助）、若手研究者への表彰制度などが検討中であるが、会員からの貴重な会費を使用するには十分な検討時間が必要との考えから、有効策を理事会で再検討することとした。また、広く会員からの要望も受けることが報告された。

なお、平成28年度の予算については、事業内容との絡みから補正予算を提示する可能性があることが承認された。

5. 平成28年度予算（庶務・会計委員会）

平成28年度の予算案が庶務・会計委員より提示され、承認された。

VI. 議長退席

VII. 閉会の辞

平成28年度体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日 時：平成28年4月1日(金) 15:00～17:00

場 所：名古屋大学 ES総合館1F ES会議室

出席者：阿江美恵子（会長）、関矢寛史（理事長）

土屋裕睦、北村勝朗、内田若希（学会大会委員）

杉山佳生、兄井 彰（企画委員）

荒木雅信、山本裕二（広報委員）

武田守弘、田島 誠（庶務・会計委員）

田村 進（監事）

欠席者：工藤和俊（学会大会委員）、西田保（企画委員）、森 司朗（広報委員）（理事：委任状）

田村 進、木島章文（監事）、中本浩揮（幹事）

挨拶（阿江会長）

<報告事項>

1. 前回理事会（平成27年度第2回理事会）、総会議事録確認

前回行われた理事会および総会の議事録が確認された。

2. 会員の異動（事務局）

田島理事より、昨年度664名から669名へと5名増加していることが報告された。

3. 会報第28号（通巻56号）発刊の準備状況について

武田理事より、国士舘大学で行われた学会大会関連原稿では4名の原稿未提出者がおり、早急に回収することが報告された。また、研究会活動紹介、研究室紹介、学位論文紹介、海外情報等はこれから原稿依頼および回収を行い、6月末には発刊、7月中の送付を予定していることが報告された。学位論文紹介は体育心理学専門領域の会員のみとすることが確認された。

4. 名誉会員の推薦について

関矢理事長より、平成29年度の日本体育学会名誉会員の推薦依頼があり、日本体育学会理事会の推薦（役員歴有りの会員が対象）に基づき、体育心理学専門領域所属からは2名を該当者として推薦したと報告された。

5. 体育学研究編集委員の追加について

関矢理事長より、体育学研究の体育心理学専門領域への投稿数の増加に伴い、新たに2名の編集委員の推薦を求められ、正木宏明先生（早稲田大学）、養内 豊先生（北星学園大学）の2名を平成27・28年度の体育学研究編集委員として追加推薦したことが報告された。

<審議事項>

1. 平成27年度決算案 【資料1】

田島理事より、平成27年度の決算案が提示され承認された。今後監事2名の監査を受ける。

2. 平成28年度補正事業案・補正予算案

関矢理事長より、平成27年の総会で提示された平成28年度の事業案及び予算案を修正し、補正事業案・補正予算案が報告され、審議された。平成28年度補正事業案としては前回提示されていた1. 日本体育学会第67回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第67回大会時のプレセミナーの企画・運営、3. 体育心理学専門領域会報第28号の発行、4. 理事会（4月1日、8月）、5. 新旧理事会（12月）、6. 総会（8月）、7. 平成29～30年度役員選挙に加えて、学会大会でのランチョンセミナー、HPの充実が挙げられ、予算案に組み込むこととなった。また、外国人（2年に1回）および日本の著名人を招聘することが事業案として了承された。

3. 平成29年度事業案

関矢理事長より、平成29年度事業案が提案され承認された。内容は1. 日本体育学会第68回大会の体育心理学専門領域の企画・運営、2. 日本体育学会第68回大会時のプレ/ポストセミナーの企画・運営、3. 体育心理学専門領域会報第29号の発行、4. 理事会（4月、8月）、5. 総会（8月）であった。

4. 第67回大会のキーノート、シンポジウム、口頭、ポスター

北村理事・土屋理事より、第67回大会のキーノート、シンポジウムに関する内容及び演者について提案され、おおよそ了承された。シンポジウムを「競技場面における感情現象」をテーマに行うこと、キーノートを2件行うこととなった。今後は本案をもとに詳細な企画を行う。

学会での発表に関しては、会場の関係上、口頭発表の数が多い場合はポスター発表に移るよう演者をお願いすることが了承され、その判断は学会大会委員に一任することが了承された。

5. 第67回大会の専門領域プレセミナー

杉山理事・土屋理事より、第67回大会の専門領域プレセミナーについて提案され、了承された。内容は原案であった「大阪体育大学スポーツカウンセリングコースの10年」と「犬鳴山不動明王ハイキングツアー」のいずれか、もしくはこれらを合わせた形で行い、懇親会も検討中である。

6. 平成28年度の学会賞選考委員の推薦

関矢理事長より、平成28年度の学会賞選考委員として西田保先生（愛知学院大学）を推薦することが提案され、了承された。

7. 平成29・30年度役員選挙

武田理事より、平成29・30年度役員選挙について方法及び資料の書き方について提案され、了承された。今後の課題として、体育心理学専門領域選出の代議員が理事でない場合、理事会にオブザーバーとして加わること、理事を2期（4年）続けた者が次期会長に就任できない現状を変えること、を念頭に置いた会則の改正を検討することとなった。

平成27年度決算報告

資料1

平成27年度決算報告(自 平成27年4月 至 平成28年3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		1,475,100	1,484,014	△ 8,914
前期繰越収支差額		294,305	294,305	0
収入合計(B)		1,769,405	1,778,319	△ 8,914
支出の部				
当期支出合計(C)		1,097,000	1,034,082	62,918
次期繰越収支差額(B)－(C)		672,405	744,237	△ 71,832
支出合計		1,769,405	1,778,319	△ 8,914

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		294,305	294,305	0	
・年度会費		1,328,000	1,338,000	△ 10,000	2千円×669名(3月20日現在)
・郵便貯金(利息)		100	57	43	
・体育学会専門領域補助金		147,000	145,957	1,043	
・平成29・30年度代議員選挙送金		0	0	0	
○収入合計(B)		1,769,405	1,778,319	△ 8,914	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	501,000	473,805	27,195	第27号発行および第28号作成
	印刷費	240,000	264,480	△ 24,480	第27号
	会報送料	56,000	56,744	△ 744	第27号
	原稿料	185,000	130,000	35,000	11名(第27号)・15名(第28号)
	会報送付用封筒代	20,000	22,581	△ 2,581	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	0	20,000	
・学会大会関連経費	小計	90,000	108,000	△ 18,000	第66回大会
	司会・演者への謝礼	60,000	108,000	△ 48,000	
	会員外交通費補助	30,000	0	30,000	
	会場スタッフアルバイト代	0	0	0	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	郵送費、色紙代、文具等	0	0	0	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当代等	50,000	11,708	38,292	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	250,000	238,901	11,099	旅費交通費・弁当代等
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	1,668	3,332	
・返還金	26年度会費過払いの返還金	1,000	0	1,000	
・当期支出合計(C)		1,097,000	1,034,082	62,918	
・予算費(B)－(C)		672,405	744,237	△ 71,832	
○支出合計		1,769,405	1,778,319	△ 8,914	

△は超過

平成27年度特別会計決算報告(自 平成27年4月 至 平成28年3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)	平成27年度記念事業積立金	200,000	200,000	0
前期繰越収支差額		200,000	200,000	0
収入合計(B)		400,000	400,000	0
支出の部				
当期支出合計(C)		0	0	0
次期繰越収支差額(B)－(C)		400,000	400,000	0
支出合計		400,000	400,000	0

*会員数昨年度664名から669名へと5名増

平成 28 年 5 月 25 日

この決算書は適正であることを認めます

監事

田 村 進

木 島 孝 文



編集後記

今回お届けする体育心理学専門領域分科会会報第28号は、現広報委員会の第2号になります。今回も事務局のご尽力をいただき、発行にたどり着くことができました。

本年の夏は、スポーツ最大のイベントの一つリオオリンピックの年であり、スポーツに関して世論の注目されるところになると考えられます。その意味でも体育・スポーツ心理学のもつ役割が再度確認される年にもなるとともに、これからの体育・スポーツ心理学の新たな発展の道筋を考えていくべき年にもなるのではないかと思います。

その意味で、本号の内容自体は例年通りですが、研究室紹介の田中先生を始め、今回若手の先生方のご報告をいただきました。研究活動として、学位論文紹介2編、海外情報1編、研究室紹介、また、昨年の学会関連のご報告などが記載されております。今回も2編の学位論文を紹介できたことは、学位の取得が継続していると同時に、学びの場が確実に拡大していることを示していると感じます。一方で、今回海外情報を報告していただいた町田先生のように新たな視点を得るために海外に挑戦していく日本の若い研究者が増えてきていること（私が、初めて町田先生にお会いしたのが北米のスポーツ心理学会（NASPSPA）でした）は、体育・スポーツ心理学の研究領域のグローバル化という意味では頼もしいことだと思います。このように国内・国外から若い研究者が育っていることは、体育・スポーツ心理学の研究領域の発展につながってくることだと思います。

最後になりましたが、大変お忙しいところ、限られた時間で、投稿いただきました先生方には深く感謝申し上げます。

広報委員会委員長 森 司朗

日本体育学会体育心理学専門領域会報 第28号（通巻第56号）

発行 平成28年7月20日 発行（非売品）
発行責任者 関矢 寛史（代表）
発行所 日本体育学会体育心理学専門領域事務局
〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1
広島大学大学院総合科学研究科
TEL & FAX : 082-424-6587
E-mail : tshinri@hiroshima-u.ac.jp
URL : <https://sites.google.com/site/jspetaiikushinrigaku/>

印刷 かもめいと有限会社
